
魔法少女リリカルなのはstrikers ~ 失った力 ~

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはstrikers〜失った力〜

【Nコード】

N6394W

【作者名】

TR

【あらすじ】

8年前の事故により、その人物はすべてを失った。

それは力や自由と言った色々な物だった。

唯一失わなかったのは名誉だけ。

これはほとんど全てのものが奪われてしまった人物の物語である。

*本作は『魔法少女リリカルなのは〜目覚めた力〜』の続編です。そちらをお読みになられることをお勧めします。

アドバースや感想などをお待ちしております。

不定期更新ですがよろしく願います。*

ブローグ 出向命令

俺はすべてを失った。

力も、自由も何もかもを。

でも、それでも俺は前に進まなければいけない。

だから俺は進み続ける。

例えばそれが地獄だったとしても。

ここは管理局地上本部

その首都防衛隊の隊長でもある、レジアス・ゲイズ中将のいる部屋に俺は向かっていた。

「失礼します ■ ■ 二等空佐です」

「入りたまえ」

ドアをノックして告げた俺にレジアスさんが入出を許可した。

俺は中に入ると俺に背を向けて外を見ているレジアスさんの後ろの方に移動した。

「何の用でしょうか？」

「お主に新たな任務を頼みたい」

「任務とは、一体どのような物ですか？」

俺は任務の内容を尋ねた。

「そこに資料がある。目を通したまえ」

「古代遺物管理部機動六課……何ですかこれ？」

俺は資料に目を通すと、聞いたこともない部署の名前があった。

「つい最近に立ち上がった部署だ。戦力の偏り、何より部隊を作る事由も見当たらん」

「……確かにこれだけの戦力が集まりしかも理由まで分からないとなると、かなり怪しいですね」

俺は、レジアスさんの言葉に賛同した。

その戦力は平均魔導師ランクがSSはあるほどだ。

明らかに異常で、良からぬことを企んでいるともとられかねない。

「そこでだ、お主にそこに潜入してもらいたい。何をするかは、分かっておるだろ？」

「はい。この部について色々調べればいいんですね？」

俺の答えにレジアスさんは俺の方に顔を向けると、満足げに頷いた。

「調べて貰いたいのは、奴らのたくらみやもしあればスキャンダルネタだ。毎日データにして指定した場所に報告をするように」

「はい！」

俺は、レジアスさんの言葉に返事をした。

要するに俺はこの機動六課にスパイ行為をするのだ。

心が痛まないと言えはうそになるが、何かがあつてからでは遅いだ。

「くれぐれも、ばれることの無いようにな？　それだけじゃなくて
もお主は体に問題があるのじゃからな」

「ご心配ありがとうございます。ですが大丈夫です。たとえ何が起
ころつと、任務は成し遂げて見せます」

心配そうに注意をしてくるレジアスさんに俺は安心させるように明
るく答えた。

俺は8年前のある事故がきっかけでからの自由をすべて失っている
のだ。

「そうか。では、 ■ ■ 二等空佐。これより出向任務に当たれ！」
「了解！」

こうして、俺は潜入調査の任務にあたることになった。

それは、俺にとっての運命を変える1年の始まりでもあった。

第1話 一悶着と再会（前書き）

ようやく本篇が始まります。
そしてさっそくの戦闘が……

第1話 一悶着と再会

「ふう」

俺、山本真人はレジアスさんのいる場所を出ると、力を抜いた。すると、とても明るいはずの俺の部屋は一瞬で暗闇に覆われた。

「えっと、確か着替えとかはここら辺にあっただよな？」

俺は手探りで闇の中を探すと、クローゼットと思われる取っ手を見つけた。

「とりあえず中にある服は適当に持っていくか」

数もそんなに多くはないはずなので、向こうでも十分入るだろう。

「よし、こんなものだな」

俺は一通り準備を終えて再び意識を集中する。

すると、再び俺の視界は明るくなり俺の部屋が再び映し出された。

「さて、行きますか！」

そして俺は赴任先の新設部隊”機動六課”へと向かった。

突然だが、簡単に説明をしたいと思います。

あの事故の後、奇跡的に俺は生きていた。

医者の話では本当に運が良かったとのことだ。

しかし、その代償はあまりにも大きかった。

魔法資質に関しては全く……いや、事故に合う前よりも格段に良くなっていたので問題は無しだ。

但し肉体面で問題が残った。

それが下半身不随と両目の失明だった。

要するに俺はもう歩くことも、空を飛んで戦う事も出来ないのだ。

まあ、歩けたとしても両目が失明している時点で誘導弾一発も放てないが。

しかし今でも俺はいつも通りに任務に出ているし、そんな所そこの犯罪者に引けを取らない自信がある。

では、俺はどうやってそれを可能にしたのか。

それを説明するのはまたの機会にしよう。

「それにしても、随分と距離があるな」

俺はリニアレールに揺られながらぼやいた。

もうかれこれ1時間はかかっている。

（早く着かないかな）

今俺の視力は元通りの状態だ。

これは一種に魔力による。

目が見えないと言うのは目から取り入れられた情報が脳に伝わらないからだ。

ならば、その情報を魔力回路を通じて頭に取り込めばいい。

もちろんこれはそう簡単な事ではない。

なので執行人の力を借りて、眼からの情報伝達を切り替えて貰ったのだ。

それが完了するのに約半年はかった。

そしてこの情報を見るには眼の魔力回路に、魔力を回さなければいけない。

しかし常に魔力を消費し続けるのは俺自身の疲労につながるために、こういった外に出る時と任務の時の身になっているのだ。

俺のやっていることは体に鞭を入れている……要するに常に自分を傷つけているのに等しいのだ。

だからこそ、俺は使い過ぎないようにするのだ。

「ふう、ようやくついたか」

あれから30分後、俺の目の前には新設された建物が見えた。

とりあえず検問所中に入る手続きを取った。

これをやらないとここにいる魔導師が来て一悶着起こすことになるからだ。

そして検問所を通過すると、俺は目にかけている力を抜いた。
これで再び視力が失われる。

（ここから先の道順はすでに把握済みだ。あとは誰かに聞けばいい）

つまりそういう事だ。

そして俺は目を閉じているのを見られないために、まるでどこかのヤクザがかけているようなサングラスをかけた。
そして一步一步集中して六課の施設に向けて歩き出した。

S i d e o u t

??? Side

私、ティアナ・ランスターは早朝訓練を終えて建物の方に戻っていました。

「待つてよ、ティア！」

走りながら私を追ってくるのは、私の友人のスバル・ナカジマです。

「早く行くわよ。昼食の時間が無くなるわよ」

私は呆れながらそう言つと再び歩き出しました。

「ねえ、あれみて！」

「何…よ」

私はスバルが指差す方向に目を向けました。

そこには青いジャケットにジーパンと言う格好で、真っ黒なサングラスをかけている男の人の姿がありました。

しかもその人はゆっくりとした足取りで、こっちに向かってきています。

「なんか怪しいよね、あれ」

「そうね。ちよつと話でも聞いてみましょう」

私はスバルにそう言つて男の人の元に向かいました。

「あの、すみません。機動六課に何かご用ですか？」

「……………」

私の問いかけに男の人は何も答えずに歩いて行きます。

「あの、ここから先は許可がないとは入れないんです！ 許可証を見せてくれませんか！」

「……………」

続いてスバルが男の人に声をかけるけど、男の人は無視して歩いて行きます。

「気づいてないってことは……………ないよね？」

「あるわけないでしょ。私達の問いかけに二回も無視しているし、私たちの姿が見えてるんだから」

スバルの問いかけに私はそう答えました。

「とりあえず拘束して事情を聴きましょう」

「うん。そうだね」

私はスバルにそう言うのとバリアジャケットを展開します。

「許可証の掲示を拒否、立ち入り禁止区域内に侵入したので拘束します」

そして私は男の人にバインドをかけます。

「なっ！？ バインド?!」

男の人はまるで突然やられた風に驚きました。

（白々しいわね）

それが私の感じた印象でした。

この時、私はそれが早とちりであることに気づきませんでした。

S i d e o u t

「なっ！？ バインド?!」

俺は突然体を拘束され、驚いた。

(手荒い歓迎だな)

俺は内心苦笑いを浮かべながら目に魔力を通ず。すると視力が戻った。

俺の目の前には、白を基調としたバリアジャケットに身を包むオレンジ色の髪をした少女と、同じく白を基調としたバリアジャケットに身を包む青髪の少女の二人がいた。

それぞれはデバイスのようなものを構えていることから、かけたのはこの二人で間違いないらしい。

「いきなり拘束とは中々だな」

「白々しいわよ。私の忠告を無視した挙句に立ち入り禁止区域に無許可で侵入したからよ。あなたには

不法侵入の罪があります」

俺の言葉に、オレンジ色の髪をした少女が反論してきた。

……何だろう、逆切れだとは分かっているのだが、頭にきた。

「所でこれを解いてくれないかな？ これは最終警告だ。こっちも可愛い御嬢さんたちに怪我を負わせるようなまねはしたくないし」

「か、かわいい！？」

なぜか俺の言葉に顔を赤らめる二人。

しかし二人からは解く気配が感じられない。

「拘束解除の気配なし。敵と判断し対処します。クリエイト、セツトアップ」

『All right・my master』

俺の呼びかけにクリエイトが答え、黒を基調としたバリアジャケットが展開された。

そして手に持つステッキを背中に固定する。

実は俺がこうして歩けるのは、このステッキのおかげだったりするのだ。

「それでは、山本真人、参る！」

「行くわよスバル！」

「うん！」

そして俺達の戦いは始まった。

「クロスファイアー、シュート！」

「無駄！ シールプロテクション！」

俺はオレンジ色の髪をした少女からの魔法弾を防御障壁で防ぐ。強度が上がっているからか、それほどきつくはない。

「おりゃあああー！」

「真正面からツッコむのは、馬鹿と言うー！！ ブレイクインパルス！」

俺は目の前からツッコむ青髪の少女に矢を放つ。それは命中すると思えた。だが……

「なッ！？」

何と少女の姿が消えたのだ。

瞬間移動でなければおそらくは……………

（幻術か）

俺はそう判断すると上空に飛翔しようとした。
地上では幻術使いとは相性が悪い。
そう判断したからだ。

『マスター後ろです！』
「っ！！？」

俺はクリエイトに言われて、慌てて後ろを向いた。
そこには銃の様なデバイスをこちらに向けているオレンジ色の髪をした少女がいた。

「クロスファイアー、シュート！」

確認すると同時に放たれた魔法弾を俺は身をそらすことで避けた。
……………はずだった。

ガキン！

鋭い音がした瞬間、俺は足の力が無くなって行き、そのまま地面に倒れた。

「なっ！？ ま、まさか」

俺は周りを見渡した。
そして見つけた。

俺が歩いたりするのに必要な黒いステッキが弾き飛ばされていた。
どうやら、オレンジ色の髪をした少女の魔法弾が当たったのだらう。

「くそ！」

俺は、上半身だけで黒いステッキを取ろうとするがそれはバインドによって防がれた。

「終わりです。あなたを逮捕します」

気づけば目の前には、銃をこちらに突き付けるオレンジ色の髪をした少女が立っていた。

（ここまで…か）

俺は諦めにも近い感じで力を抜いた。

S i d e o u t

ティアナS i d e

「クロスファイアー、シュート！」

私が男の人に放ったクロスファイアーは、男の人に避けられました。ですが……

ガキン！

鋭い音を立てて、男の人が背中につけていたステッキが弾き飛びました。

「くそ！」

すると、男の人は突然地面に倒れこむと上半身だけで黒いステッキを取ろうとしていました。

それに啞然としながら私は男の人にバインドをかけます。

「終わりです。あなたを逮捕します」

私は男の人にクロスミラージュを突き付けてそう告げました。

「分かった、降参だ。抵抗はしないから一つだけ頼みを聞いて貰っていいか？」

「内容にもよりますが」

私は男の人の提案に、警戒しながら答えました。

「ここ……機動六課の部隊長に合わせてほしいんだ。そこですべてを話す」

「……………聞いてみますので待ってください」

私はスバルに男の人が逃げ出さないように監視してもらつと、男の人から少し離れた場所で部隊長に通信をつなぎます。

『どうしたんや？』

「お忙しい時にすみません。八神部隊長に会いたいと言う人がいるんですけど」

私はここ機動六課の部隊長の、八神部隊長に事情を説明しました。

『うーん……とりあえず連れてきてもらってええか？』

「はい。失礼します」

私は通信を切ると、男の人の所に戻りました。

「部隊長が会うそうです。ついて来てください」

「そうか。あとついでに黒いステッキを渡してくれるか？」

男の人がさらに要求してきました。

（あの黒いステッキ、この人にとってかなり重要な物であるのは間違いないわね）

問題はそれがどのような物か。

仮にここでこの人に聞いても素直に答えてくれるだろうか？

そしてもし要求通りにあれを渡して、抵抗されたら八神部隊長に危害が加わる可能性もあった。

なので私の出した結論は。

「すみません。それはできません」

「え！？　つて、おい！　引きずるな！　つて痛い痛い！」

私は有無も言わずに男の人の腕をつかんで引っ張って行きまました。

S i d e o u t

「部隊長が会うそうです。ついて来てください」

「そうか。あとついでに黒いステッキを渡してくれるか？」

俺は何とか部隊長と会えることが出来るので、ほっと安心してもう一つ頼みごとをした。

あれがないと俺は歩くことが出来ないのだ。

「すみません。それはできません」

「え！？　って、おい！　引きずるな！　って痛い痛い！」

しばらく考えて出された結論に、俺は反論しようとしたが、オレンジ色の髪の少女は俺を引きずりだしたのだ。

分からないかも知れないが、引きずられるのはかなり痛い。

「でしたら立てばいいのでは？」

「だからそれは……あぶ！？」

青髪の少女が俺にそう言ってくるが、俺は反論しようにも引きずられる痛みで満足に話すことが出来ない。

今日は本当に厄日のようだ。

S i d e o u t

??? Side

私、八神はやては長年の夢だった部隊を設立することが出来ました。そして最初の任務も大成功と言う実に好調な滑り出しとなったのです。

なので、とても今は問題はないはずなのですが……。

「はあ……」

「どうしたのですか？ はやてちゃん」

ため息をつく私に夜天の書の融合機もあり、私の家族でもあるリインフォース・ツヴァイが心配そうに聞いてきました。

「いやな、今日一人ここに、出向してくるらしいんや」

「そうなんですか、でもそれがはやてちゃんの溜息とどう関係が」

私はリインフォースに見えるように、書類を見せました。

出向してくる人の名前は書かれてはいなかったけど、魔導師ランクや経歴、資格そして元の部隊名が記されていました。

「名前が書かれてませんね。って、元の部隊は地上本部なんですか！？」

「そうなんよ。あまり疑いたくはないんやけどスパイやないかと私は考えとる」

しかも元の部隊は地上本部のレジラス・ゲイズ中將の部隊。

あの人は私たちの事を嫌っていたので、そういう事も考えてしまう。

「失礼します」

そんな中、私が呼んでいたのはちゃんと、フェイトちゃんが部隊長室に入ってきました。

「あ、忙しいのに呼び出してごめんな」

「ううん、気にしなくても大丈夫だよはやてちゃん」

「そうだよ、はやて」

私の謝罪の言葉に二人は笑顔でそう言ってくれました。

「フォワードの調子はどう？」

「うん。前の任務がいい刺激になったみたい。みんな頑張ってるよ」

私はなのはちゃんの答えを聞いてうれしく思いました。

「ところで、呼び出したのはどうして？」

「そうやった、実はね——」

私はリインには成したのと同じ内容の話をしました。

「魔導師ランクSS!？」

「しかも元の部隊はレジラス・ゲイズ中将の部隊」

二人はそれぞれ違った反応を示します。

「もしかしたらスパイやないかと私は考えとる。二人はどう思う？」

「うーん。あの人は私たちのような魔導師をあまり快く思っていないって言うけど……」

「だからと言ってスパイまでよこすようなことをするなんてあまり考えられないかな。もしかしたらちよつとした嫌がらせかもしれないよ」

私の問いかけに、二人は意見を出してくれました。

「そうやね。とりあえずは会ってみないと分からないね」

そんな時でした。

「どうしたんや？」

突然つながった通信に、私はそう問いかけました。

『お忙しい時にすみません。八神部隊長に会いたいと言う人がいるんですけど』

相手はティアナでした。

「うーん……とりあえず連れてきてもらってええか？」

私は首を傾げながら、ティアナにお願いしました。

『はい。失礼します』

そして通信は閉じました。

そしてそれから数分後。

「八神部隊長。男の人を連れてきました」

「うん、お疲れさ……って、何で引きずっとん!？」

私の元に訪れたティアナとスバルに私は、地面でうつぶせに倒れている男の人のを見て思わずそう叫んでしまいました。

S
i
d
e

o
u
t

第1話 一悶着と再会（後書き）

この次は主人公紹介です

主人公設定（ネタバレ注意）（前書き）

主人公についての項目です。

ストーリーの進行具合に応じて追加します

10/23 追記：【使用可能魔法】に技を追加しました。

主人公設定（ネタバレ注意）

【名前】 山本 真人

【年齢】 19歳

【性別】 男

【容姿】 黒の短めの髪が特徴で、黒くて透き通った目が印象的。

【性格】 10年前と比べるとやや活発的な性格となった。
8年前の事故により下半身不随、両目の失明と言った後遺症が残る。

周りの人達の協力によって何とか日常生活を送り、任務に出れるまでになった。

【所得資格】

- ・戦技教導
- ・普通自動車運転免許
- ・執務官

魔法関連

【魔導師ランク】 SS+

【所持媒体】 クリエイト

【使用可能魔法】

一刀両断（剣状態のみ）：剣に魔力を通して相手に切りかかる半物理攻撃。

その威力はまともに喰らったら、致命的なダメージを与えるほど。

ただし、隙がしやすい。

効果【物理大ダメージ】

ブレイク・イヤー（弓形態のみ）：魔力で生成した矢を射る攻撃魔法。

貫通力に長けており、どのような決壊や防御魔法ですらも貫く。

その代りダメージは低めだ。

効果【物理ダメージ＋決壊（防

御魔法）破壊】

ライトフレイヤー（弓状態のみ）：魔力で生成した弓を放つ攻撃魔法。

その威力は中程度だが一瞬にして5発分も放てる。

また矢を使って、槍のように攻

撃することも可能である。

効果【物理ダメージ＋追尾】

断絶（剣状態のみ）：真人が新たに生み出したオリジナルの攻撃魔法。

斬るというよりは爆撃に近い物なので、一刀両断に比べるとそれほどダメージは高くない

ただしノックバック効果があり、相手を少々

ではあるが後方へと吹っ飛ばす。

効果【論理ダメージ+ノックバック（小）】

ブレイク・インパルス（弓状態のみ）：ブレイク・イヤーの進化版。
軌道修正は不可能だが、高い攻撃力を誇る。

効果【物理ダメージ大】

ブレイク・イヤー マルチショット（弓状態のみ）：ブレイク・イヤーを複数にしたもの。

威力は変わら

ずに最大15発を同時に放つことができる

効果【物理ダ

メージ（大）防御魔法破壊】

トレース（全状態可）：すべての魔法弾や矢を相手に追尾させることができる。

魔力を少々食う程度で、それほど影響もないためによく使用される。

効果【追尾】

シール・プロテクション：真人が主に使う防御魔法。

強度はそこそこだが俊敏に張ることができるため、いつもはクリエイトの自動防御に頼っている。

効果【防御（中）】

リフレクション：相手の攻撃をそのまま跳ね返す魔法。

シールプロテクションを展開しなければいけない。

効果【反射】

ミラーインケルト：相手の攻撃を跳ね返す魔法。

リフレクションのようにシールプレクションを展開しなくてもいいため、多用できるが魔法陣に接触した魔法が圧力となって真人にのしかかるので、それほど使うことはできない。

効果【反射】

一刀連舞（剣状態のみ）：剣の一振りで相手に数回分の攻撃を加える魔法。

威力はそこそ弱いものの、最初の一撃を回避しない限り防ぐことは不可能なため、かなりの戦力となる。

効果【物理ダメージ小＋防御魔法無効化】

刃呪縛（剣状態のみ）：剣の一振りで魔法刃を複数放つ攻撃魔法。

その威力はどのような硬い物でも貫くことができるほどだ。

また魔法刃に触れたすべての魔法は無効化

される。

しかしそれは自分の仕掛けていたトラップ

魔法も含まれる。

効果【貫通ダメージ中＋全魔法無効化】

ブレイキング・ブレイク：魔力で生成した矢を槍のように扱う技。

その威力はどのような鉄壁な魔導師でさ

え、地面に倒れ伏すほどだ。

ただし敵にかなり接近しなければいけないため、カウンターを食らいやすい。

効果【貫通ダメージ大】

インバインド・カモフラージュ：別名光学迷彩ともいう。

相手に自分の姿を見えなくする。

ただし魔力や殺気などを出せば簡単に見つかり、また空間攻撃に対しては弱くなる。

効果時間も30秒が限界なため、使いどころを間違えると戦局が不利になる。

効果【光学迷彩＋総合防御力低下

（使用者）】

悪魔断拳：相手に魔力をまとった拳で攻撃をする技

相手に3回殴りかかったのち、爆発を起こさせるため、喰らったら負けることは必至。

効果【貫通・物理ダメージ大＋防御魔法無効化】

神性典：執行人の持つ特殊な技を使えるようにランクダウンしたものの。

魔法の力に対抗することができる。

それ故、真人はほんの一部しか使えない

無を促す光の環：神性典の第2章に分類される技。

すべての魔法や攻撃を防ぎつつ、そのエネルギーを吸収して自らのエネルギーに変換する。

効果【防御（物理攻撃のみ）＋吸収】

輪廻をせし円陣：神性典の第1章に分類される技。

すべての魔法や攻撃を跳ね返す。

”リフレクション”と違うのは、本人に負荷がかからないのと、そのプロセスが簡単であること、および反射に追加して追尾能力がついていることである。

効果【反射＋追尾】

第2話 出向初日（前書き）

今回ははやて達との再会がメインです。

第2話 出向初日

「八神部隊長。男の人を連れてきました」

「うん、お疲れさ………って、何で引きずっとん!？」

永遠に引きずられる俺だが、懐かしい声がした。

妙なイントネーション、これは関西弁だろう。

だとすれば、そんな話方をする人は一人しかいない。

「その声って、もしかしてはやてか？」

「え………もしかして真人君か!？」

どうやらあたりだったようだ。

俺は顔を上げた。

「ッ!？ や、やあ、久しぶりだねみんな」

そこにいたのははやてにフェイトとなのはだった。

顔を上げた時に見てはいけないものが見えているが、必至に意識しないようにする。

「真人！ 久しぶりだね」

「………」

フェイトは俺に笑顔で言ってくれたが、なのはは浮かない顔で落ち着きなく視線を変えていた。

「………」

それはしょうがないことだった。
なぜなら、俺となのはの関係は……

「ところで、どうしてうつぶせになっとん？　まるで二人の下着を覗くような感じやし」

「なッ!？」

はやてが投じた爆弾により、全員がスカートを抑えながら俺から離れた。

……　ちよつとショックだぞ。

「誰もやりたくてなってるんじゃない!!　この二人が突然俺を襲ってきたんだ!!」

「……　どういう事が、説明してくれるか？」

俺の言葉を聞いたはやてが、二人に尋ねた。

そしてオレンジ色の髪をした少女が説明する。

彼女曰く、どうやら俺は再三の忠告を無視したために拘束されたらしい。

当然だが俺はそんなことに気付いてはいない。

「とりあえず引きずられた意味は分かった。でも、どうして真人君はうつ伏せになったまま何や？」

「……　実は俺、訳合って下半身不随になって歩けないんだ」

俺はしばらく悩んだ末、本当の事を言う事にした。

誤魔化そうとしたらどうなるかが目に見えていたからだ。

「そ、それは本当なんか？」

「嘘についてどうするのさ」

はやての言葉に、俺は苦笑い交じりに答えた。

「え、でもあなたさつきは立ったり歩いたり……」

「それはあの黒いステッキのおかげだ。あれがあるから俺は立ったり歩いたり空を飛んだりできるんだ」

「と言うことは……」

俺の説明に、オレンジ色の髪をした少女と青髪の少女が顔を見合わせた。

「ところで、その黒いステッキはどこにあるんや」

「彼女が弾き飛ばしたから出入り口に落っこちてるんじゃない？」

はやての問いかけに俺はそれを行った人物をジト目で睨んだ。

「す、すぐにとりに行きます!!」

「それは必要ない」

慌てて取りに行こうとした二人だが、それを遮るように男の人の声がすると、部隊長室に一人の男性が入ってきた。

「お前の探しているのはこのステッキだろ」

俺にステッキを渡してくれた人にお礼を言おうとステッキ片手に立ち上がった。

「ありがとうございます……って、お前健司か!？」

その人物は俺の男友達の健司だった。

「よっ！ 少々遅れたがようやく抱えていた山が片付いたから急いで来たら入り口に見慣れた物が落ちてたからな、慌ててここに来たんだ」

そう言つて健司は頭を恥ずかしそうに掻いていた。

「ところで、俺達はどのような仕事をすればいいんだ？」

「えつとやな、まず山本二等空佐にはスターズ分隊の教導官として働いて貰いたいんや。副隊長が不在の時とかに高町分隊長のサポートが主な仕事や」

「分かりました」

俺は、はやての指示に素直に頷いた。

「続いて井上一等空尉やけど、山本二等空佐と同じくライトニング分隊の副隊長補佐として働いて貰いたいんや。ライトニング分隊長は色々と多忙夜からその補佐をしてもろうたいんや」

「了解しました」

健司の方も納得したようで、頷いていた。

「それじゃ、隊舎内の案内を、高町一等空尉、頼んでもええか？」

「はい！」

はやての頼みに、なのはは嫌な顔一つせずによ承した。

「それじゃ、二人も下がってええで」

「はい、失礼しました。」

続いて俺をここまで引きずってきた少女たちは一礼すると部隊長室を去って行った。

「二人は明日の朝礼の時に紹介するから、それまでは荷物の整理とかをしておいてな。後、山本二等空佐は少し残ってくれるか？」

「わかりました」

はやてからの指示に、俺達は頷いた。

そしてなのはと健司は部隊長室を後にすると、はやてが咳払いを一つした。

「うちが何を聞きたいかは分かっていると思うから、単刀直入に聞かせてもらうで」

「答えられる範囲でしたらお答えします」

はやての言葉に、俺はそう返した。

おそらく、はやては俺の事を本部が送り出したスパイだと考えている。

だとすれば、聞いてくる内容も確実に絞り込まれる。

「真人君は、地上本部から来たスパイなんか？」

やはり思っていた通りだ。

「さあどうでしょう？ それはあなたのご想像にお任せします。ですが、考えても見てください。地上本部があなた達の弱みを握らせるためにわざわざスパイを送り込むような大それたことはするでしょうか？」

「何が言いたいんや？」

俺の問いかけに、はやての表情が変わった。

「つまり潜入させる方にはかなりのリスクがあります。それほどの危険を犯してまで潜入させるでしょうか？ もしそれをするくらいでしたら査察を入れれば済む話ですし」

俺の答え方はこれだった。

YESかNOではなくあいまいな答えにさせておき、さらに疑問を投げかけるのだ。

俺は嘘は言っていない。

やったのはあいまいな受け答えと疑問の提唱だけだ。

「そうやったね。疑ごうてごめんな」

「いやいや、地上本部から来たのだと分かれば警戒して当然だ。それじゃ、これで失礼するよ」

そして俺は部隊長室を後にした。

外に出ると、なのはと健司が待っていた。

「お、もう話は終わったのか？」

「ああ。待たせて悪かったな、二人とも」

俺の謝罪に健司は気にするなと告げ、なのはは視線をそらすだけだった。

「それじゃ、隊舎の案内をするね」

「よろしくお願いします」

そして俺達の隊舎の案内が始まった。

『おい、真人』

『どうした？ 健司』

案内をされている間、健司が念話で話し掛けて来た。

『いや、お前まだなのはと話が出来てないのか？』

『ああ』

健司の言葉に、俺は頷いて答えた。

俺となのはは8年前の事故から関係が悪くなってしまったのだ。理由としては、俺がこうなったのは自分のせいだと思い詰めている

なのはだ。

話をしようにも避けられてできないのが実際の所だ。もちろんだが、俺はこうなったのは自分の未熟さが故だと思い、なのはのせいだとは思ってもいない。

だが、そのことを話したいのだが避けられては話しようがない。そして今のようになってしまうのだ。

『全くしょうがない奴らだ』

健司のボヤキが非常に心に突き刺さった。

結局なのはと話すことが出来ず部屋に案内されたのだが……

「広っ!？」

その部屋はものすごく広かった。

一体何人部屋なのだろうかと思わせるほどだ。しかもベッドも大きいし家具もそろっている。

「……………きれいなバラにはとげがあると言う事で、クリエイトカメラ、マイクを探してくれる?」

『了解です』

俺は念のために、探知魔法をかけた。
その結果……

「マイクが冷蔵庫に一つ、テレビに一つ、天井にカメラが15台。
やってくれるな子狸野郎」

案の定盗聴器やカメラが見つかった。
おそらく俺を監視するための物だろうが、詰めが甘い。

（防音魔法とかかけておくが）

俺はそう考えるとすぐに行動に移したのであった。

「真人、入るぞ」
「どうぞ」

夜、寝る準備をして後は報告だけという時、健司が訪ねてきた。

「どうしたんだ？　こんな夜遅くに」

「………… お前の部屋がどんなものかを見に来たんだが、すごいな」

しばらく間を開けると、健司は大げさに感想を述べた。

「健司はどこなんだ？」

「俺は相部屋さ。何だか赤毛の子供と親しくなっちまってさ。イヤーお前がうらやましい！」

俺としてはそっちの方がうらやましいんだが。

「そう言えばお前の恋人のアリスとはどうなんだ」

「と、突然何を聞くんだお前は！！」

俺の問いかけに、健司は顔を真っ赤にして必死に反論してきた。

ちなみにアリスと言うのは俺の元部下であり、ステッキを作ってくれた女性だ。

健司は彼女に告白をして受け入れてもらったらしい。

「今は現場を退いて自宅でデバイス作成とかやってるらしいよ」
「なるほどな」

最近姿を見かけないと思ったらそういう事だったのか。

「それじゃ、俺部屋に戻るわ。お前の負担になったらまずいしな」

「いや、負担に思ったことなんてないぞ。逆に感謝してるくらいさ」

俺の言葉に健司は片手を上げ、手を振りながら部屋を去って行くこととした

「あ、そうだ。言い忘れたことがあった」

部屋を後にしようとしていた健司は俺の方に振り返った。

「この部隊ははやての夢なんだ。それを邪魔するんなら………言わなくても真人ならわかるだろ？　では、お休み」

俺の言葉を聞かずに、健司は部屋を後にした。

（やっぱりばれてるな）

俺は心の中でそう思いながら苦笑いを浮かべた。

だが、俺も任務で来ているのだ。

何もしないわけにはいかない。

「唯一出来るのは情報を伝えづらくすることくらいか」

俺はそう思いながら目の前にモニターを出すと報告データを打ち込んでいく。

出向1日目

本日、部隊長他分隊長たちと挨拶をした。

部隊長は八神はやて、分隊長には高町なのは、フایت・T・テストロッサの二人である。

その他のメンバーについては不明。

尚、本日六課のメンバーと拳を交えることになった。
中々に伸び代がありそうである。

明日から本格的に業務が始まる。
果たして、俺の運命はどうなるのであろうか……

「よし、これで送信」

俺は今しがたできたデータを送信した。
なぜ小学生レベルの作文形式にしたのかと言えば、情報が伝えにくいからだ。

今書いたものも、重要な情報は最初の三行のみだ。

あとは全部あまり関係がない日記のようなものになる。

要するに、向こうを苛立たせて何らかのアクションを取らせるのが俺の狙いだ。

首尾よく潜入任務の終了を宣告してくれればありがたいんだが。

「まあ、なるようになれ、だな」

俺はそう呟くと、ベッドに横になり眠ることにした。
こうして出向初日は幕を閉じたのであった。

第2話 出向初日（後書き）

次回はもしかしたら、模擬戦になるかもしれません

第3話 挨拶と模擬戦（前書き）

真人の立ち位置ですが、基本レジアス側です。
ですが本心では六課側でいたいと思っています。
よく言えばどっち側でもないということになりますが、白黒をつけるとレジアス側です。

第3話 挨拶と模擬戦

「それでは、始めるぞ、山本」

「はい。お願いします。シグナム」

今、俺はシグナムと対峙していた。

シグナムの手には彼女の刀型デバイスの『レヴァンティン』がこちらに向けて突きつけられていた。

なぜこんなことになったのか、それはほんの少し前へと遡る。

集合場所に集まった俺達は隊長陣の場所に立つように言われていた。

「えー、本日皆さんに集まってもらったのは、本日付で赴任してきた方を紹介するためです。高月二等空佐と井上一等空尉です。それでは、一言どうぞ」

はやてに呼ばれた俺達ははやての横に移動した。

「えっと、只今ご紹介に授かりました井上健司です。階級は一等空尉です。若輩者ですが、自分に出来る限りの全力を注ぎ部隊長他皆

さんの足手纏いとならぬよう尽力して行きますので、よろしく願います！」

最初に挨拶をした健司が頭を下げると、どこからともなく拍手が沸き起こった。

「山本真人です。階級は二等空佐です。階級などは関係なく皆さんと楽しく真剣にやって行きたいと思しますので、よろしくお願いします」

次の俺のあいさつを終え頭を下げると、再び拍手が湧き上がった。

「あまり長くなるとあれなので、これにて解散です」

はやてのその一言で、俺達の一日は幕を開けた。

「まずは、訓練スペースに移動かな？」

「どう考えてもそうだと思うけど」

健司の問いかけに、俺は若干呆れながら答えた。

「あ、あのー！」

「ん？」

突然声をかけられた俺は、声のした方に振り向く。
そこにいたのは昨日、俺と戦ったオレンジ色の髪をした少女と青髪の少女だった。

「えっと、君たちは確か……」

「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

俺が困惑していると、青髪の少女……ナカジマさんがものすごく大きな声で名前を告げた。

「うっさいわよ！ ティアナ・ランスター二等陸士です」

そんな彼女を軽く小突きながら、オレンジ色の髪をした少女……ランスターさんは名前を言った。

「エリオ・モンディアル三等陸士です！」

「同じくキャロ・ル・ルシエ三等陸士であります」

さらにその後ろにいた赤髪の少年……モンディアルとピンク色の髪をした少女……ルシエさんが名前を名乗った。

「俺は井上健司。呼び方は自由でいいぜ」

「同じく山本真人だ。健司と同様、呼び方は好きにして貰っていいよ」

俺と健司は名前を名乗った。

「それじゃ、健司さんと真人さんで！」

「失礼でしょ！ 馬鹿スバル」

「いや、君もそう固くならなくていいんだって。俺ってそう言うのが微妙に苦手だからさ」

突然下の名前で呼んだナカジマさんにランスターさんが言うが、俺はそう言ってフオーした。

実際問題、あまり固くされるのは慣れてないのだ。

「あの、そろそろいかないと訓練に遅れるのでは？」

「あ、そうだよ！？ みんな急ごう！」

モンディアルの言葉に、俺は慌ててそう言った。

「あ、俺はちよつと用があるから失礼するよ。午後までには戻ってこれるようにするから」

「分かった。頑張つてな」

俺は走って行く健司の後姿にそう言つと、そのまま急いで走った。

「そう言えば、お互いに自己紹介とかはした？」

「あ、はい。先ほど名前の確認をしました」

訓練場に到着した俺達に、なのはが問いかけた。

「それじゃ、訓練を再開する前に山本君には模擬戦をやってっもらいます」

「も、模擬戦ですか!？」

なのはの突然の宣告に俺達フォワードメンバーは、驚いた。

「うん。山本君には私達が相手にする敵の事とか知ってもらいたいし、何よりウォーミングアップには最適だと思ってね」

「……………分かりました」

なのはの言葉に、俺はしばらく考えるとそう答えた。

「それじゃ、山本君は訓練スペースに移動してね。フォワードのみんなは見学しようか」

「……………はい!」「……………」

俺はなのはやフォワードメンバーの返事をする声を聴きながら、訓練スペースへと向かうのであった。

廃墟のような場所が立ち並ぶ場所に移動した俺は、なのはからの指示を待っていた。

『それじゃ、山本君、バリアジャケットを展開して』
「分かりました。……………クリアイト、セットアップ」

通信でなのはからの指示を聞いて俺はデバイスでもあり相棒でもあるクリアイトに呼びかけた。

『All , right . my master』

俺の呼びかけに反応しバリアジャケットが展開された。
まずは初期装備の剣状態だ。

『それじゃ、準備はいいかな?』

「はい。いつでも」

なのはの問いかけに、俺は頷いて答えた。

『私達がこれから戦わないといけないのは、これ』

なのはの言葉に反応して、目の前に縦長の機械が10機現れた。

『その名称はガジェットドローン、通称ガジェットで自立行動型の機械だよ。今から山本君はそれを破壊してもらおうよ。ここまでで何か質問は?』

「いいえ。ありません」

一通り敵の情報は手に入ったので、俺はそう答えた。

『それでは、レディー・ゴー！』
「っと!?!」

なのはの合図と同時に、ガジェットが攻撃してきた。
俺は慌てて避けながら、剣をガジェット一機に向けて振りかぶる。

「刃呪縛！」

剣を振り切るのと同時に放たれた魔法刃は、ガジェットを次々に切り刻んでいく。
そしてそれはすべてのガジェットを破壊した。

ティアナSide

「すごい……」

私が言えたのはそれだけでした。

「あ、あれがSS+ランクの魔導師の動き何ですか？」
「AMFを展開しているのに、何事もないように動いています」

一緒に見ていたスバルとキャラが、口々に信じられないとばかりに口を開いています。

「うん。それが山本君なんだよ」

「ここ数年で、山本の腕は格段に上がったな」

私達の言葉になのはさんと、様子を見ているシグナムさんが嬉しそうにそう言ってきました。

（やっぱり凡人は私だけか）

私は彼の戦っているのを見ながらそう考えていました。

S i d e o u t

『それじゃ、次行くよ。次のはガジェット？型で、主に上空を飛んでいるよ』

続いて現れた10機のガジェットは上空の方を飛んでいた。
今の剣状態は非常に振りだ。

「クリエイト、イヤーフォーム！」

『了解です！ イヤーフォームチェンジ！』

俺の指示に、剣型のマテリオが弓型に変わった。

「さあ、一気に片を付けるぞ！」

俺の気合の言葉と同時に一斉砲火が始まった。

俺はそれを華麗にかわしつつ、俺の十八番の攻撃を放つことにした。

「ブレイク・イヤー マルチショット!!」

高々に述べた俺の技名と共にやを放つと、それは15本の矢へと増殖した。

それは寸分くるわず、上空に浮遊するガジェットに命中し、爆発した。

（よし、なんとかなったな）

俺は自分の感触に、ほっと胸を撫で下ろしながら次の敵を待つことにした。

3人称Side

「あのガジェットを一撃で……」

「す、すごい」

真人の戦う様子を見たフォードたちは、すでに固まっている状態だった。

「高町、あいつと一戦構えたいのだが、いいか？」

「え!？」

唐突に切り出したシグナムの言葉に、なのはは驚きをあらわにした。

「何、私も久しぶりにあいつと剣を交えただけだ」

シグナムの言葉に、なのは考え込んだ。

ちなみに、この模擬戦は山本のデータを取るためでもあった。

その指示ははやての物であった。

模擬戦をすれば何かしらかぼろを出す、はやてはそう踏んでいたのだ。

特に魔導師ランクの偽装などはしっかりと出るのだ。

「分かりました。でも、10分間ですよ。危険と判断したらすぐに止めますからね」

「十分だ」

なのはの提示した条件に頷くと、シグナムは訓練スペースへと向かって行った。

S i d e o u t

（これで終わりかな？）

俺はしばらくたったが新たな敵が来る気配はないので、少しだが警戒を解いていた時だった。

「待たせたな」

「し、シグナム!？」

突然上空から現れたのは、シグナム二等空尉。

「山本、10分と言う短い間だが、お前と剣を交えさせてもらおう」
「分かりました。今回は勝たせていただきます！」

俺の答えに、「その心意気だ」と笑いながら言うつと剣型のデバイス
『レヴァンティン』をこっちに向けて構えた。

（突然すぎてあれだけど、自分の器量を図るには良い機会かな）

俺は昔、シグナムに勝ったためしが一度もないのだ。
だからこそ、自然と弓を掴む手も強くなる。

「それでは、始めるぞ、高月」

「はい。お願いします。シグナム」

シグナムの言葉に、俺は軽く会釈をしながら答えた。
そして俺とシグナムさんとの戦いが幕を開けたのであった。

第3話 挨拶と模擬戦（後書き）

次回は、シグナム戦です。
新技も多数登場する予定です。

第4話 真人VSシグナム（前書き）

大変お待たせしました。
いよいよシグナム戦です。

第4話 真人VSシグナム

「せい！」

最初に動いたのはシグナムさんだった。
手に持つレヴァンティンを振りかざしてきた。

「っふ！」

俺はそれを横に移動することで交わすが、シグナムさんは剣を横に振りぬこうとした。

「ちい！」

俺は慌ててバックステップで回避すると、弓を構えて射る。

「地獄の矢よ、今ここに。ライトフレイヤー！！」

数は5本。

「甘い！！」

それをシグナムさんは剣を振ることによって相殺する。
しかし、それはすべて想定済み。

「ブレイクイヤー・マルチショット！！」
「なッ！？」

俺は不意を突く形で一気に15発の矢を射る。

さらにそれだけでは終わらない。

俺は右手に矢を具現化して、槍のように掴むとシグナムの方に肉厚する。

狙うのは槍を使った大技『ブレイキング・ブレイク』だ。

しかし……

「はぁ!!」

「つぐう!?!」

俺は突然吹き飛ばされた。

3人称Side

「す、すごい……」

「シグナムさんもすごいですけど」

「真人さんもすごいです」

急ぎよ始まったシグナムとの戦いにFWメンバーは感想を述べていた。

「……………」

ただ一人なのはだけは、無言でそのモニター画面を凝視していた。

「なのはさん？」

「え？ あ、うん。何かな？」

突然名前を呼ばれたのはは、驚きながら呼んだ人物に尋ねた。

「えっと、なのはさんはどう思っかなって気になったので」

「あ、うん。彼はとても強いよ。本当に」

スバルの問いかけに、まるで自分に言い聞かせるように答えるのはを、スバルは首を傾げながら表情で見ている。

S i d e o u t

「ツつう！」

俺は背中に鋭い痛みを感じながら、ゆっくりと立ち上がった。何があつたのかはよく分からなかった。

おそらく突っ込んだ時にカウンターでもくらったのだろう。

（まだまだだな、俺も）

俺は自分の未熟さに、苦笑いを浮かべながら立ち上がった。

「まだ立てるか。さすがだな山本」

「いえいえ、そう言うシグナムさんもお強い」

俺の前まで来て感心したようにつぶやくシグナムさんに、俺はそう言い返した。

「ふ、そう言うお前もだ山本。実際先ほどの攻撃は少々危うかったぞ」

そしてどちらからともなく武器を構える。

「時間もあと3分だ。これで決めるぞ」

「望むところです!」

そして俺は賭けに出ることにした。

「インバインド・カモフラージュ」

「なッ!？」

俺の使った技に、シグナムが驚きをあらわにする。

「ど、どこに行った!？」

そして俺の姿を探すかのように辺りを見回す。

——インバインド・カモフラージュ

それは簡単に言えば光学迷彩だ。

自分の姿を相手に見えなくさせることが出来るのだ。

但し魔力を放出したりすれば、簡単に見つかるとし空間攻撃はもろに食らってしまう。

俺はその状態でシグナムさんに肉厚する。

「ッぐ!？」

そして魔力をまとった拳をシグナムさんに3回連続で振りかぶる。

「悪魔断拳！」

「があ！」

俺がそう叫んだ瞬間、シグナムさんの立っている場所が爆発した。
それはこの勝負が俺の勝利と言う形で、幕を閉じた瞬間でもあった。

第5話 説明（前書き）

今回は最短です。

第5話 説明

早速だが、俺は今、非常にピンチを迎えている。
俺は今ブリーフィングルームにいる。

「それじゃ、始めるで」

「はい！」

はやてによつて、モニターに映し出された映像は俺とシグナムさんとの模擬戦時のものだ。

あの後、俺ははやて達に説明を求められたのだ。

「まずは、これや」

はやてが止めたのはブレイクイヤー・マルチショットを放つときの映像だ。

「これはブレイクイヤー・マルチショットです。一気に数本を放つ魔法です」

「なるほどな。それじゃ、次や」

俺の問いかけに満足したのか、はやては映像をさらに進めた。

「つぎはここや」

「どうやって姿を消したんですか？」

はやてが止めたのは、俺は姿を消すところだった。

そしてエリオ（彼曰くそう呼んでほしいとのこと）が目を光らせて聞いてきた。

「え、えつとあればインバインド・カモフラージュと言って自分の姿を消す魔法です。ただ魔力や気配までは消せませんが」

俺は若干引きながら答えて行っただ。

全員の表情は呆れているのと固まっているのとで半々だ。

「それじゃ、最後や。これの説明をしてくれる？」

「それは悪魔断拳です」

映し出されたのは、僕がシグナムさんに止めを刺そうとしている映像だった。

「何なのそれ？」

首を傾げながらフェイトが訪ねてきた。

「えつと、魔法殺しと言われた技で、相手の防御魔法を貫くことが出来るんです」

「何ともまあ……………」

「規格外だな」

俺の答えに、はやて達は呆れながら呟いていた。

そう言われても俺の方が困る。

これは単純に俺の努力の成果なのだから。しかもこれに見合う代償は支払っている。

まあ、前払いだが。

「えつと、これで以上でしょうか？」

「……………そやね。今日の所はこれで終わりや。みんなも訓練に戻っ

てな」

俺の問いかけに、はやてはしばらく考え込んだのちに、FWメンバーにそう告げた。

はやての言葉に元気よく返事をする、全員がブリーフィングルームを後にしていった。

そして俺もそれにならい部屋を後にするのであった。

第6話 一日を終え

日が暮れた夜、俺はスバルやエリオたちと一緒に夕食を食べていた。二人の食べる量は………気にしないでおう

「へえ、それじゃみんなはもう任務に出たんだ？」

「はい、リニアレールの襲撃事件です」

俺の言葉に、エリオはそう答えた。

正直このメンバーがそのような任務をこなせることに驚きしかなかった。

それだけに、かなりの素質が見られた。

「あの時はガジェットドローンが出てきて大変でした」

そう言って一口食べるのはキャラ口だった。

何故かフォワードメンバーは名前で呼べと言ってきた。

親しみを込めてなのか、それともそれがここの流儀なのかは定かではないが。

「そう言えば、真人さんって今までどんなことをしていたんですか？」

「俺か？ そうそう言えるようなことはないが、普通に任務にあたっていたりしたただだよ」

スバルの鋭い質問に、俺は苦笑いを浮かべながら答えた。

正直言って任務の内容まで聞かれたらどうすればいいのだろうか？

「その任務ってどんな奴なんですか?!」

「あー……」

本当に聞いてきた。

さて、どうしたものか。

そう考えに集中していると、切れのいいパンチ音が聞こえた。

「守秘義務で任務の内容は言えないことが多いって習ったでしょうが、馬鹿スバル！」

「あー」

「うわあ」

俺はティアナのげんこつを見て苦笑いを浮かべるしかできなかった。と言うより、スバルにだけは容赦がないんだね。

「すみません山田二等空佐」

「別にかまわないけど、階級は付けなくていいから」

僕は苦笑い交じりにそう言った。

階級を付けられると妙に背筋がぞくぞくするのだ。

まあ、それは単に俺がこの階級に向いていないことを意味するのであるが。

【ようやく気付いたか】

執行人の声があったような気がしたが俺はあえてスルーした。

「分かりました。………山田さん」

「そうそう、その調子」

階級を付けずに呼ぶことに抵抗があるのかしばらく間が空いたが、

呼んでくれたので俺は満足げに頷いた。
その後は夕食を食べ終えて自室へと向かうのであった。

―― 本日の記録 ――

本日、フォワードメンバーと接触をした。
聞けば任務に一度出ているとのことなので、素質はある模様。
またシグナム二等陸尉と模擬戦を行った。
奮闘の末、自分の勝利で幕を閉じた。
しかし、次の戦った時はどうなるかは全く持って不明である。
フォワードメンバーに関しては添付ファイルにて送信します。

「ふう」

俺は今日の報告書をレジアスさんの所に送信した。

まだ向こうからアクションはない。
だが俺はこれをずっと続けるつもりだ。
別にどちらに見方をするわけではない。
ただ単に、第3者の視点で見ていく。
それが俺の本当の狙いなのだ。

「それに気づいたのはさっきなんだけどな」

俺はそう一人でツッコむと、ベッドにもぐりこんで、眠りにつくの
だった。

第7話 派遣任務

「はい、それじゃあ今日の朝練はここまで」

『あ、ありがとうございます！』

なのはの号令に、フォワードメンバーがお礼を言つとトボトボと隊舎の方へと歩いて行つた。

この機動六課の訓練は明らかに異常な密度だった。

朝から朝練、その後朝食を済ませて午前中の訓練、お昼を挟んで午後の訓練となる。

時にはデスクワークの仕事もあるから、新人たちにはかなりきついはずだ。

そんな中、俺と健司は裏方に徹していた。

「これでいいのかよ？ 真人」

「こうやってデータをまとめるのも、重要な仕事だつてことさ」

新人たちが朝練をしている傍らで俺達は必死にデータをまとめていた。

俺がやっているのは新人たちの訓練データなどをまとめてそれを隊長に送信することだ。

端から見れば簡単なことに見えるが、これだけでも隊長陣の仕事を減らせられるのだ。

そんな時、突然目の前に通信のモニターが開いた。

『あ、二人ともちよつとええか？』

「八神部隊長。なんですか？」

そこに写っていたのははやてだった。

『部隊長室に来てほしいんや。忙しいのに堪忍な』
「了解です」

俺と健司ははやてにそう答えて通信を閉じた。

「とうわけだから、行くぞ」

「は！？ お前もう終わったのかよ？！」

俺の言葉に、健司が驚いた風に呟く。

「ああ、さっきな」

「お前早いよな。俺なんてまだ半分も行っていないぞ」

俺は『健司の場合は遅すぎなのでは？』と言いたくなるのを堪える。

「はあ………健司、そっちのデータの半分こっちでやる」

「悪い、俺こっぴうの苦手でさ」

健司は申し訳なさそうに言うが、9割のデータをよこしてきた。
言葉と行動が全く合っていないと思いながら、俺はデータをまとめるのであった。

はやての通信から数分が経ち、俺達は部隊長室に向かった

「すみません。遅れました」

「気にせんでええよ」

はやてからお許しが出たところで、俺は本題を切り出した。

「ところで、突然呼び出してどうしたんだ？」

「実はな、この後派遣任務があるんよ」

「派遣任務」

「ですか？」

はやての言葉に、俺と健司は思わず聞き返してしまった。

「そうや。聖王教会からロストログアの捕獲をしてほしいと言う依頼で、私等が行くことになったんよ」

「なるほど……」

「ここはレリック専門のはず、なのにどうしてロストログアで俺達が行くんだ？」

俺ははやての言葉に納得したが、健司は納得できないのかはやてにそう問いかけた。

「そのロストログアがレリックの可能性も十分に考えられるから……だよな、はやて？」

「うん、そうや。出発は緊急の任務がない限り二時間後やさかい、準備してな」

はやての代わりに俺が答えると、はやては頷いて俺達に指示を出した。

「了解です」

「ところで、その場所ってどこ？」

「それはな……………」

健司の問いかけに、はやてが答える。
その次の瞬間。

「「ええ！！？」」

俺達の驚く声が部隊長室に響き渡る。

第8話 行き先と再会（前書き）

すみません、再開のベクトルが少々違います。
それでは、どうぞ

第8話 行き先と再会

俺はあの後、部屋に戻ると急いで仕度をしていた。

「何だ何だ、なかなか楽しそうではないか」

「執行人………久しぶりに出てきてその言葉か」

俺は突然出てきた執行人にため息をつきながら話した。

「遊びじゃないぞ?」

「分かってる。だが、今回は俺達にゆかりのある世界だ。であるならば俺はこの状態で行こう」

俺の注意に、執行人はそう答えた。

そう、俺達の派遣任務の目的地は第97管理外世界。

そこの日本海鳴市なのだ。

そこは俺達の出身地でもあるのだ。

なので、俺も少しではあるが胸を躍らせていた。

そして支度を済ませた俺は集合場所へと向かうのであった。

俺と健司、そして機動六課の前戦メンバーはヘリに乗って転送ポータルへと向かっていた。

「第97管理外世界、文化レベルB……」

そんな中、キャラは行き先の情報が書かれたモニタを見ながら呟く。

「魔法文化無し、次元移動手段無し……って、魔法文化無いの！？」

そしてティアナは魔法文化が無いことに驚いていた。

「無いよ。うちのお父さんも魔力ゼロだし」

スバルがティアナに当然のように答える。

そう言えばスバルの名前は微妙に俺達と同じだったな。

「スバルさん、お母さん似なんですよね？」

「うん！」

「いや……なんでそんな世界から、なのはさんとか八神部隊長みたいなオーバースランク魔導士が……」

「突然変異というか、たまたま……な感じかな？」

ティアナの疑問に答えたのは、はやてだった

「わ！？ あ、すみません！」

「ええよ、別に」

慌てて謝るティアナにはやては笑顔で答えた。

「私も、はやて隊長も魔法と出会ったのは偶然だしね」

「な？」

「へえ」

なのはとはやての言葉に、フォワードメンバーは意外そうな声を上げていた。

「ところで、気になったんですけど」

そんな時、キヤロが突然俺の方を見て話した。

……いや、正確には俺の横にいる人物だが。

「この人は誰なんですか？」

「そうそう、さつきから気になってたんだよね」

やはり俺の横に座って目を閉じて精神統一をしている執行人だった。

「ああ、こいつは俺の相棒でもあり魔法の師匠でもある、執行人だ。ちなみに本人曰くこれが本名らしい」

「本名……ですか」

俺の説明を聞いて苦笑い交じりにスバルがツツコンできた。

「そう言う……ことになるな」

俺もそう答えるしかなかった。

その後、ラインが大きくなれるなどのやり取りをしているうちに、転送ポートにたどり着いた。

その際、俺の転送先を違う場所にして貰った。

転送先の人には許可は取っておいたので問題は無し。

ただし、隊長陣に知られると怒られる可能性が大なのがあった。

【おい、真人。お前隊長陣に何と言って許可をもらったんだ？】

【寄る所があるからとだけ】

執行人の念話による問いかけに、俺はそう答えた。

そして俺達は第97管理外世界へと向かうのであった。

一瞬感じたふわりと宙に浮く感覚がなくなると、俺は閉じていた眼を開けた。

「ふう……………」

「おかえり、真人」

一息ついている中、俺に声をかけてきたのは、母さんだった。

「ただ今母さん、父さん」

この家の転送ポートはリビングに設置してあったのだ。

「何だ、元気そうじゃないか」

「そうよ、昔に大けがをした時はどうなるかと心配したわ」

俺の両親は俺が無事だったことと、久しぶりに会えたことを喜んで
いた。

「ごめんね、なかなか連絡でいなくて」

「はは、便りがないのは元気な証拠だ」

俺の言葉に、父さんは軽く笑いながらそう答えた。

「何とも気前のいい両親な事で」

「君も久しぶりだな。いつも息子の手伝いをしてくれてありがとう」

執行人の呟きに父さんは、そうお礼を告げた。

「何、僕は特に何もしてないさ。だからお礼は言わなくてもいい」

「全く素直じゃないんだから」

俺の言葉に、リビング内に父さんと母さん、そして俺の笑い声が響
き渡った。

【真人君、これから任務を始めるから来てくれるかな？ 場所はク
リエイトに送っておいたから】

【了解】

そんな時、なのはからの念話に、俺はそう答えた。

「ごめん、これから仕事なんだ。たぶん今日は戻ってこないかもし
れない」

「そうか。仕事、しっかりやるんだぞ」

「体調には気を付けてね」

俺の言葉に倒産と母さんは、俺にエールを送って快く送り出してくれた。

「それじゃ、行ってきます」

そして俺はなのはに指示された場所に向かうのであった。

第9話 作業開始（前書き）

大変お待たせしました、第9話になります。

第9話 作業開始

なのはからの念話の後、俺は急いで家を後にすると指定された場所に来ていた。

「この地点に探索をセツトして……………」

そして俺は今単独で森の方にサーチャーをしかけていた。
理由としては俺のいる所から近かったからでもあったが。

「にしても一人は嫌だなー」

俺はボソツと呟いた。

一人と言うのはかなり悲しいのだ。

（まあ父さんと母さんに会えたからよしとするか）

俺はそう自分に言い聞かせて作業を続けるのであった。

なのはと合流をした時、シャルルさんから念話が入った。

【ロングアーチから、スターズとライトニングへ。さっき、協会本部から新情報が届きました。ロストログアの所有者が判明。運搬中に紛失したとのことで、事件性はないそうです】

【本体の性質も、逃走のみで攻撃性は無し。ただし、大変に高価なものなので、できれば無傷で捕らえて欲しいとのこと。まあ、扱い抜かずにしっかりやる！】

『はい！』

シャルさんとはやての念話に、俺達はそう返事をした。

どうやら、今回の対象物には危険性はないようだ。

これはほんの少しではあるが、安心材料になる。

「ちょっと、肩の力は抜けたかな？」

「はいです」

「ほっとしました」

なのはの問いかけに、リインとスバルが答えた。

「と言うか、そろそろ日も落ちてきましたし、晩御飯の時間ですね！」

わくわくした様子で言うリインに俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。

そんな中、なのははどこかに念話をかけているようだった。それが終わったかと思うと何かを考え込んでいた。

「うーん……手ぶらで帰るのも何かな」

そう呟くと、なのはは私服のポケットから携帯電話を出してどこか

に電話をかけ始めた。

「あつ、お母さん？　なのはです！」

「「え！？」」

なのはの言葉に、スバルとティアナが驚いていた。

「にやはは、うん、お仕事で近くまで来てて」

「そうなの、ホントすぐ近く……」

【なのはさんのお母さん……】

【そ、それは存在はしていて当然なんだけど】

なのはが電話で話しているのをよそに二人は念話でそんなやり取りをしていた。

と言うよりかなり失礼だぞ。

確かになのはの能力の高さから母親がいること自体が驚きかもしれないが。

「……さて、ちょっと寄り道」

「はいです」

電話を終えたなのはがそう言うと、リインが嬉しそうに答えた。

「あの、今お店って……」

「そうだよ。うち、喫茶店なの」

「喫茶翠屋、安くておいしいお店ですよ」

ティアナの疑問になのはとリインが答えた。

『えええええ〜！？』

そして再び二人の驚きの声が響き渡った。

（だから驚き過ぎだって）

俺は心の中でそうツッコんだ。

こうして、俺たちは急ぎよなのはのご両親が経営している、喫茶店翠屋へと向かうことになったのであった。

第10話 突撃、喫茶翠屋

そしてやってきました喫茶翠屋。

なのはは喫茶店にためらいなく入った。

「お母さん、ただいま」

「なのは、お帰り！」

なのはの声を聴いて厨房から出てきたのは、なのはの母親の桃子さんだった。

【お母さん、若ッ！？】

【ホントだ……】

そして二人は母親の若さに驚きをあらわにしていた。

「お、なのは！ 帰ってきたな！」

「おかえり～なのは」

桃子さんに引き続き、出てきたのはなのはの父親の士郎さんに、お姉さんの美由紀さんだった。

「お父さん、お姉ちゃん！」

と言うよりこの二人も若い。

本当に七不思議の一つにでもなりそうな勢いだ。

「あ、この子達、私の生徒」

「おお、こんにちは、いらっしやい」

「あ、はい！」

「こんにちは！」

「こんにちは」

挨拶をされた二人は姿勢を正してお辞儀をする。
俺もそれに習って挨拶をした。

「あら、真人君！ 久しぶりね」

すると突然桃子さんが話しかけてきた。

「ご無沙汰しています」

俺はどこか申し訳なくなつて来て、桃子さんに再びお辞儀をした。

「ケーキは今箱詰めているから」

「うん、フェイトちゃんと待ち合わせ中なんだけど、いても平気？」

「勿論」

なのはの問いかけに、桃子さんは笑顔で頷いた。

「ああ、コーヒーと紅茶もポットに入れておいたからな。持ってたあげてな？」

「ありがとうございます」

土郎さんの言葉に、リンがお礼を言う。

「お茶でも飲んで、休憩していつてね」 えっと……」

美由紀さんはそう言っていたが、どうやら名前の方が分からないらしく戸惑っていた。

そう言えば何気にまだスバル達の自己紹介をしていなかったっけ？それに気づいたスバル達が、慌てて自己紹介をする。

「あつ、スバル・ナカジマです!!」

「ティアナ・ランスターです」

「スバルちゃんに、ティアナちゃん!!」

スバルとティアナはちゃん付に若干表情が変わった。ちゃん付は嫌なようだ。

まあ、俺もされるのは嫌だけど。

「二人とも、コーヒーや紅茶とか、いけるかい？」

士郎さんはスバルとティアナに尋ねた。
ちなみに俺の場合は断然紅茶派だ。

「は、はい!」

「どっちも好きです!!」

「あ、スバル、ティアナ、真人君、こっちにおいて
「はい!」

促されるように俺たちは席に着いた。

「三人とも仕事が大変だから元気が出るミルクティーね」

「はい!」

「ありがとうございます」

なのはのお姉さんの言葉に、二人はお礼を言った。

俺も無言で一礼する。

「しかし、三人とも……うちのなのは、先生としてはどうだい？
お父さん、向こうの仕事はどうもよくわからなくてな」

「あ、その……すごいいい先生で！」

「局でも有名で若い子達のあこがれです」

「俺はよく分かりませんが、たぶんそうだと思います」

なのはとはここ最近全く話をする機会がない。
だからこそその答えだった。

「へええ……！？」

そしてそれを知った二人は、意外そうな表情をしてなのはを見た。
どうやら子供のころを知る人としては、まったく想像がつかなかったらしい。

【なんか……なのはさんが普通の女の子に見える】

【うん………】

（当たり前でしょうが……）

二人の念話に、心の中でそうツツコミを入れながら出された紅茶を飲む。

「あ、そうだ。クッキーでも食べるか？　これがまた自信の新作でな」

「あ、お構いなく」

「は、はい」

士郎さんの提案に、二人は恐縮して答える。

「でも、おいしそうです」

「それじゃ、ラインに一個」

「わーい！ いただきます」

クッキーを受け取ったラインは美味しそうに食べた。

ある意味すごい人だ、本当に。

「真人君、ちょっといいかな？」

「あ、はい」

俺は突然士郎さんに外に連れていかれた。

「あ、あのこんなところに連れ出して何の用ですか？」

「ああ、お礼を言おうと思ってね」

俺は士郎さんの一言で、それが何のことなのかが分かった。

「なのはを助けてくれてありがとう」

「い、いえ！ あの、あれは俺が勝手にやった事なので頭を上げてください」

俺はいきなり頭を下げた土郎さんに慌てながら言った。

「…………君なら私の娘を任せても大丈夫そうだね」
「へ？」

俺は土郎さんの言葉に、固まってしまった。

「これから、なのはをよろしくね。真人君」

そう言つと土郎さんは、話が終わったのか中へと入って行つた。

（何だかな）

俺は複雑な心境だったが、すぐに切り替えるとお店の中へと戻つた。そうこうしている間に、フェイトが来たので俺達はフェイトの乗つてきた車に乗り込んで、待機所へと戻るのであつた。

第11話 銭湯で（前書き）

色々なシーンを飛ばして銭湯篇に参りたいと思います。

第11話 銭湯で

待機所に戻って合流した美由紀さんとエイミィさんにアルフ達と夕食を食べた俺達は、ひよんなことから銭湯に来ることになった。そして海鳴市内にある『海鳴スパラクーアツ』へと俺達は向かうのであった。

中に入ると、店員が元気よく挨拶をしてきた。

「はい、いらっしやいませー！ 海鳴スパラクーアツへようこ……団体様ですか？」

大勢で入ってきた俺達を見て、店員は一瞬驚いたが、すぐに対応した。

「えーと、大人15人と……」

「子供4人です」

はやてとフェイトが人数を店員に言った。

と言うより19人ともなれば団体になるよな、普通は。

ティアナは確認のために子供のメンバーを確認していく。

「エリオと、キャロと……」

「私と、アルフです！」

リンがティアナに手を挙げて自分達をアピールする。

「おー！」

そしてアルフは嬉しそうに返事をする。

しかし、こういった場所に獣耳とかしっぽとかを出してていいのだから？

（まあ、コスプレだと思われるか）

俺はそう強引に納得した。

「えっと、ヴィータ副隊長は？」

するとスバルはヴィータに確認を取る。

（おーい、スバル。それ禁句だ）

案の定ヴィータはスバルを睨みつけて一言

「あたしは大人だ！」

と不機嫌そうに言った。

（後で絶対にスバル逆襲されるな）

俺は心の中で手を合わせた。

「あ……はい！ では、こちらへどうぞー！」

そんなやり取りを見ていた店員は若干表情が引きつっていた。
この日、この店員はある意味大変な時になったに違いない。

「お会計しとくから、さき行つてな」

「はい！」

はやての言葉に一同は声を揃えて返事をする。

まるで引率する先生と生徒のようだ。

まあ、ある意味その通りなのだが。

それはともかく俺達は中の方に進んだ。

「にしても本当にすごいな、ここは」

俺は案内図を見て呟いた。

こここの銭湯は当然だが、男女で分かれている。

そしてすごいのは露天風呂だ。
男女ともにあるのはいいのだが、何と混浴用の露天風呂まであるのだ。

普通の露天風呂もあるが、出る所を間違えれば混浴の目に合うことは必須だ。

（気を付けないと）

俺はそう心に強く決意した。

と、そんな事を考えているとエリオは”男”、”女”と分かれて吊されている暖簾を確認していた。

「……ああ。よかった、ちゃんと男女別だ」

エリオは心底安心していた。

（そう言えば、エリオは女性用のお風呂に入っているんだっけ）

俺は思い出した。

だとすればエリオがここまで安心する理由は分からなくもない。
まあ、世の男性どもはものすごい贅沢を言っているように感じるかもしれないが。

とそんな時、キャラが笑顔でエリオに近づく。

「広いお風呂だって。楽しみだね、エリオ君！」

「あ……うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

エリオの言葉にキャラの表情が曇る。

「え……エリオ君は？」

エリオはキャラの悲しげな表情に戸惑いつつも必死に抵抗する。

「ぼ、僕は……ほら一応、男の子だし」

「んー……でもほら、あれ！」

エリオはキャラが指さす方の注意書きに目を通した。

「注意書き？ えっと……女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願い……します」

キャラは笑顔のまま、エリオの逃げ道を狭めていく。

「ふふッ、エリオ君10歳！」

「え！？ あ……」

慌ててエリオは逃げ道を探る。

「おい、あれ助けなくていいのか？」

「楽しそうだからもう少し見てる」

俺の元にやってきた執行人の問いかけに、俺はそう答えた。

俺の答えに、執行人は『えげつない』とつぶやいていた。

どうでもいいが、この黒いステッキと言うのは微妙に目立つ。

ちなみにエリオは時よりこっちの方に、助けを求める視線を送って来ていた。

「うん。せっかくだし、一緒に入ろうよ」

と、フェイトはキャラに援護射撃を送った。

「フェイトさん！」

キャロは嬉しそうにフェイトを見るが、エリオはまさかフェイトがキャロの援護射撃をするとは思ってもいなかったようで、動揺していた。

「い……あ……い、いや、あ、あのですね……それはやっぱり、スバルさんとか、隊長達とかアリサさん達もいますし！」

エリオは必死に断ろうとするが、その言い方だとあまり断っている風には感じない。

「別に私は構わないけど？」

エリオの抵抗もむなしくティアナはあっさりと承諾した。

「てゆうか、前から、『頭洗ってあげようか？』とか言ってるじゃない」

そしてスバルもだ。

「う……」

エリオは段々逃げ場が無くなってきていた。

「私等もいいわよ。ね？」

「うん」

「いいんじゃない？仲良く入れば？」

アリス、すずか、なのはと、次々にエリオの女湯入浴許可がおりてくる。

そしてフェイトは『男の言われない言葉』ベスト10に入っている。うな言葉を言って、止めを刺した。

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は久しぶりだし……入りたいなあ……」

とうとうエリオは抵抗することが出来なくなった。

（頃合いか）

いままで面白そうだからと黙っていた俺は、助け舟を出すことにした。

「まあまあ、フェイト、俺も男同士の親睦を高めたいなと思ってたんだから、ここは男女別に入りましょう」

そんな俺の言葉に、エリオは非常に喜んだ。

「「えー」」

そしてフェイトとキャロは不満そうな声をあげる。

だが、俺の方も対策を取っているのだ。

【後で、エリオをそっちに行かせるので、それでいいでしょ？】

【うーん。それなら】

俺の説得に、フェイトは渋々頷いた。

「それじゃあ、失礼します」

俺はそう言つと男湯の方に向かった。

第11話 銭湯で（後書き）

今気づいた問題点：入浴時、真人はどうするのか？

真人はステッキによって歩くことができるという設定ですので、まさかお風呂内に持つていくなんてことはできません。

と言うことで、現在ご都合主義な設定になりますが、できる限り矛盾の少ない設定を検討中です。

第12話 触れ合う心（前書き）

よくある混浴イベントです

第12話 触れ合う心

男湯でキャロが乱入してくるというハプニングもあったが、エリオとキャロの二人で仲良く子供用の露天風呂の方に出て行った。

「まさか本当に忘れてるとは思ってなかったぞ」

「全くだ」

「面目ありません」

男湯に入った俺は、ある重要な事を忘れていたのだ。

それが、ステッキがないと歩けない事だ。

では、なぜそんなことになったのか。

普通のお風呂の時、俺はステッキを防水魔法をかけてお風呂内に持ち込んだり、執行人をメインに権限移動させたりなどしていたのだ。だからこそ、いつもの感覚で入ろうとしたら、思いっきり止められたのだ。

だからと言って魔法文化のないこの世界で、人前で執行人とユニゾンをするという事も出来ず俺は健司と執行人に支えられるようにして入浴する羽目になったのだ。

「しかも眼への魔力供給を続けていただなんて。笑い話にもならないぞ」

「言い返す言葉もございません」

さらに、俺は目への魔力供給を続けた事による疲労によって、強制的に目に魔力を供給できなくなってしまったのだ。

これも1時間ぐらい放置していれば回復はするが、さらに健司たちに迷惑をかける羽目になった。

つまり、俺は今何も見えず、そして歩けないという数年前に逆戻り

状態と言う事だ。

「そこで、そんな馬鹿なお前に素晴らしい光景を見せてやろう」

「素晴らしい光景って……今の俺はそんなことできないんだぞ？」

執行人の言葉に、俺は首を傾げながら問いかけた。

「そんなの、俺とユニゾンをするればいいだけだ。何案ずるな。今ここのあたりは湯気が濃い。静かにやれば誰にもばれまい」

俺の心配を見透かしたように執行人は言う、強引に俺とユニゾンをしてきた。

その為、俺は全ての感覚がシャットダウンされた。

（一体何をする気だ？）

俺の心配をよそに、不意に感覚が戻った。
ただ視力と足に力が入らないのを除いて。

「それでは、どうぞごゆるりと」

「は？ おい、どういう意味だよ！！」

俺の問いかけに執行人は答えなかりか、俺から離れていく。

「おい、聴いてるのかよ、執行人！！」

「え、真人……君？」

その時、俺の耳に聞きなれた人物の声が聞こえてきた。

「な、なのは！？」

その声は、なのは物だった。

なのはSide

「ふう、いいお湯」

私は、お湯にのんびりと浸かっていました。

「あれ、露天風呂なんてあったんだ」

私は露天風呂という看板が見えたので、そっちに行くことにしました。

「うわあ、いい景色」

そこは、夜空がとてもきれいな場所でした。
そんな時です。

「おい、聴いてるのかよ、執行人!!」

「え、真人……君？」

突然真人君の怒鳴り声が聞こえました。

「な、なのは!？」

そこにいたのは、私のせいで迷惑をかけてしまった真人君の姿でした。

Side out

(ど、どどどうしてここになのはが?!)

俺は突然の事に混乱していた。

「もしかして、ここって混浴用の露天風呂なのか!？」

「……………どういう事が、聞かせてくれる？」

なのはのどすの入った言葉に、俺は怯えながらありのままのことを話した。

今の俺の状況、そしてここがどういう場所なのかを。

「そ、そうだったんだ。私ちゃんと看板を見ない出来ちゃったんだ。ごめんね」

「い、いや。俺の方こそ、色々ごめん」

俺となのはの間で変な空気が漂っていた。

「……………ね、ねえ」

「な、何だ？」

俺は、なのはが突然声をかけてきたので、思わず驚いてしまった。

「一緒に入ってもいい……かな？」

「……………へ？」

俺はなのはの言葉に、それしか言えなかった。

「やっぱりダメ……だよな」

「い、いや！　ダメじゃない。なのはが嫌じゃなければ……」

俺はそこまで言うとは必死に体を端の方へと動かして、なのはが入るスペースを作る。

「そ、それじゃあ……………お邪魔します」

なのははそう言いながら、俺の隣の方に浸かった。

俺は内心心臓バクバクだった。

だが、これはもしかしたら、俺がなのはと話をするいい機会なのではないかと悟った。

だからこそ俺は後悔の内容に話をすることにした。

S i d e o u t

3 人 称 S i d e

真人が混浴用の露天風呂でなのはと遭遇しているところ、男湯では……

「うまく行っただか？」
「ああ、ばっちしだ」

健司と執行人の二人が悪人のように笑っていた。

「これでなのはと話をする状態になるだろう」
「だな。俺もあいつがなのはとの関係がぎくしゃくしてるのは嫌だし、それにあいつには幸せになってもらいたいしな」

健司の言葉に、執行人は静かに笑った。
それを健司は咎めるように執行人を見る。

「何、今僕は安心して居るのだよ。君を消さなくてよかったとな。
最初のころのお前は最低な奴だった」

「…………俺もあの頃の自分に会ったら殴り飛ばしてやりたいさ。最強の力を手に入れただけで舞い上がっていた馬鹿な俺を」

執行人の言葉に、健司は昔を懐かしむようにつぶやく。

「お前は、転生者の中でのいい見本でもあり真人の親友だ。だからこそ、もう一度頼もう。わがマスターを、よろしく頼む」

執行人の問いかけに健司は

「こちらこそだ。執行人！」

力強く頷いたのであった。

S i d e o u t

「なあ、なのは」

「な、何……かな？」

俺はなのはに意を決して話し掛けた。

「どうして、なのはは俺と昔のように話してくれないんだ？」

「ッー!!」

俺の言葉に、なのはが息をのんだ。

「もし俺が何か悪いことをしたなら教えてくれ。頭を下げた謝る」

「……………」

俺の言葉に、なのはは何も言わない。

だがやがて、なのはは重い口を開いた。

「だって、私なんか真人君と話すけりなんてないもん」

「……………」

俺はなのはの言葉を一言一句聞く。

なぜなら、それがなのはの本心、心の叫びだからだ。

「私のせいで、真人君は歩けなくなつて目が見えなくなつて。こんなことをした私なんか真人君と話すなんてこと——もういい！——」

俺は、ついに聞いていられなくなり、なのはの言葉を遮ってしまった。

「なのは、俺はあの時の事で怒ったりなんてしてない。あれは油断しきった俺が悪いんだ」

「真人君のせいじゃない！！ 私のせいだよ！！」

俺の言葉に、なのはも頑なに譲らない。

「確かに自分の体調管理が出来ていなかったなのはも悪い。だけどなのはだけのせいじゃない。俺だって油断をしていたんだ。だからお互い様なんだ」

俺は静かに説得するように言っていく。

ここでしくじったらすべてが終わる。

それに、話し合いの場を設けてくれた二人に顔向けができない。

「それに男は女性を守って南畝だろ？ 俺にも少しはかつこつけさせてくれよ」

「私は……私はどうすればいいの？ ねえ、答えてよ。私はどうすればいいの？」

なのはの言葉に、俺は少しの間考えると、すぐに答えを出した。

「だったら、前と同じように俺に接してくれる……でどうだ？ 俺はこっちの方がとてもうれしいな」

「うう……うあああああ！！！」

俺の言葉に、なのはは突然泣き始めた。

俺はそんななのはの頭に手を置いて優しく撫でることにした。

どうでもいいが、目の見えない中で良くできたなと思ったのはその後の事だった。

「何だか……心の重荷が無くなっちゃったよ」
「そうか。それは何よりだ」

あれから数十分して、泣きやんだのはと会話を楽しんでいた。
その会話は、とても楽しくて昔の光景を彷彿とさせるものであった。

「なあ、なのは？」
「ん？ 何かな真人君？」

そんな中、俺はもう一つ重要な事を切り出すことにした。

「あの時さ、俺任務に行く前にこつ言った事覚えてるか？」
「うん。『この任務が終わったら、話したいことがある』だったよね？」

なのはの言葉に俺は頷いた。

「今、その話したいことを言っな」
「うん」

俺は深呼吸をした。

そして自分の気持ちを伝えた。

「俺はなのはの事が、一人の女性として好きだ!!」
「ッ!!」

それは、8年来の告白であった。

第13話 彼のやるべき事と敵（前書き）

今回の設定は最低レベルのご都合主義設定です。
それでは、第13話をどうぞ

第13話 彼のやるべき事と敵

「よ、迎えに来たぞ」

「……………」

なのはが上がつてしばらくして、時を見計らったかのように執行人がやってきた。

「何だ何だ？ その様子だと話せなかったのか？」

「……………実は」

俺は事の顛末を話した。

「へえ、告白までしたか。で、返事は？」

「……………」

俺は首を横に振って執行人の質問に答えた。

「そうか……………嫌な事を聞いたな、すまない」

「大丈夫だ」

何だか執行人が変な方向に勘違いしている。

まあ、放っておこう。

告白はしたが、俺はなのはから返事を聞いていないのだ。

「隣良いか？」

「……………ああ」

俺は執行人の声色から何かを感じ、頷いた。

「お前の体の後遺症だが」

「分かってる。俺の体の中に駆け巡っているAMFもどきの影響……だろ」

俺は執行人のセリフを遮って告げた。

俺の後遺症は、執行人曰く魔力結合を無効化するAMFに似た何か
が、体中に張り巡らされているからだという事だ。

つまり、力を入れようとしても入れられずに正常な行動が出来ない。
だから目が見えなくなったり、足が動かなくなったりするのだ。
俺の持っているステッキは、それを無効化する効果があるのだ。

「知ってるなら話が早い。それをやった首謀者はおそらく、転生者
だ」

「……………そうか」

執行人の言葉に、俺はそう答えた。

転生者。

不正な方法で違う世界に強制的に割り込んでくるイレギュラー。

その存在だけで世界に負荷をかける一種のウイルスだ。

俺の役割は、この転生者を排除すること。

その為に、俺は転生者の能力の高さに合わせて強くなっていったり
するのだ。

あの事故の後に魔法の力がさらに高まったのは、その為だろう。

「俺がメインならそれ自体を無効化できる。だが、お前の場合はある
の杖がなければ無効化できない」

「分かっているさ。これを解消する方法が神化するか、解毒剤を作っ
てもらえないことくらい」

神として格上げする”神化”は、俺の切り札だ。

これをやれば、俺は最強の強さと身体能力を手にすることが出来る。但し、問題がある

「神化すれば、もう元の人間には戻れなくなり、お前は神として長い時を生きることになる」

執行人の言うとおりだった。

神化すれば、俺の寿命は引き伸ばされる。

だがそれは知っている人たちを次々に失うことを意味していた。だからこそ俺はその方法に打って出れなかったのだ。

「まあ、じっくりと考えると良い。そうすれば、他に何か名案が思いつくだろうよ」

「……そうだな」

なのはへの告白の返事に重ねて転生者の事と、考えることがたくさんだ。

だが、一つずつこなさなければいけないというのも確かであった。

その後、お風呂から上がった俺達を待っていたのは、ロストロギア

の反応を知らせる物であった。

第14話 狩人（前書き）

繰り返しますが、私はアンチ転生者です。
途中でイラっとする内容が含まれますが、寛大な心で読んでくださ
い。

第14話 狩人

ロストログアの反応を察知した俺達機動六課メンバーはその対処に向かったのだが

【真人、転生者の反応ありだ】

執行人からの通達に、俺はこっそりと現場を離れた。
全ては毒を排除するために。

??? Side

やあ！ 愚民ども！！

俺様の名前は阿久津 あくつ 正様だ ただし！！

俺様はくそが身に間違えて殺されて、そのお詫びをかねて転生され
たんだ。

まあ当然だな、この俺様を殺すだけでも罪深いのだ。

それはそうとリリカルなのはだぜ！！

いやっほう！！

ハーレムを築いてモテモテ背簡素ライフの始まりだ！！

ツと、俺様のかっこいい容姿を説明してやろう。

女顔で、赤い長めの髪に赤い眼SA！

貴様ら愚民には到底たどり着けないよな。

ん？　なんだ？　愚民と言うな？

本当のことを言って何が悪いのさ！

俺は今この世界最強だ。

確かStrikersの世界だったな。

男は全員消してハーレムを築くか！！

そう言えば、転生者を狩る不届きな野郎がいるって言ってたな。

ま、この俺様に掛かれれば火を見るより明らかだな

ふはははは！！

そんな時だ。

「そこで、気味の悪い妄想に浸っている変態」

「ん？」

恐れ多くも俺様を変態と言ってきた野郎は黒一色のマントに白い仮面をかぶっている野郎だった。

Side out

俺は今、転生者の姿を確認した。

（うわあゝ）

【これはまた強烈だな】

しかし、感じたのは嫌悪感だけだった。

外見ではなく、中身からにじり出てくる穢れが俺の気分を悪くして吐き気を催させる。

（とつとと終わらせよう！）

そう言っただけ俺は前に踏み出た。

「そこで、気味の悪い妄想に浸っている変態」
「ん？」

俺の声に反応した男がこっちを見た。

「無礼者！！ この誇り高き俺様に変態とは、死刑物だ！！」
「……………それは失礼。では、一つお尋ねしましょうか？」

俺ははらわたが煮えくり返りながらそう言った。

「まあ、愚民どもの問いかけに答えてやろう。何たって、俺様は世界最強なのだから！ ふははははは！！！！」

「お前は転生者か？」

気持ち悪い妄想ごとを言いながら笑う男に、俺は疑問をぶつけた。

「ああそうさ！ 俺様はなくそ神に殺されて、ここに転生された、阿久津正様だ」

（いつそのまま地獄にでも送ればいいものを）

俺は内心でため息をつく。

だが、気を取り直して、右手に剣状のクリエイトを具現化する。

「では、阿久津正、貴殿をこの世界の害と認定し排除する」

「はははは！！　そうか、お前が転生者を狩る不届きな野郎か。最強の俺様に勝てると思ってるのか？」

男が大きな声で笑う。

俺の事を知っているあたり、良いのか悪いのかは複雑だ。

「では、俺様の力、見せてやるぜ！！　変身！」

そう言つて男はベルトを巻くと大きな声で叫んだ。

そこには緑色の仮面をかぶった男の姿があつた。

あれが健司の言う”かめんらいだーだぶる”と言つものだろう。

「行くぜ！　ライダーキック！！！」

そう叫んで俺にとび蹴りを仕掛ける阿久津。

だが、その勢いは完全に遅い。

それ故俺の場所まで届かない。

「俺様のライダーキックを防ぐとはなかなかだ。だが、これで終わりだ！！」

『MAXIMUM DRIVE！！』

変なものを差し込んだ阿久津の体から覇気が出る。

見れば右手にある剣から炎が立ち込める。

端から見れば最強技のようにも見えるが……

「行くぜ！　俺様の必殺技！　ゴッドブレイド！！！」

大層病氣的な技名をつける物だと思いながら、俺は剣を見つめる。
大振りで狙いがつけられていない。

しかも剣の握り方から避けられたら隙が出ることは間違いない。
俺の取った行動は……

「なッ！？」

あえて突進して、阿久津が作り出してしまった開き空間に入り込み
クリエイトを振りかぶる。

「一刀両断！」

「ガフ！？」

その一撃によつて、阿久津の変身は解け、後方に大きく吹っ飛ばされた。

「な、なぜだ！！ なぜこの最強の俺様の攻撃が！！」

「確かに、お前の持つ”力”は最強だ。だが、所詮そこまでだ。当然だよ、何もしていない素人が、最強になれるわけがないのだから。それなのに最強だとか言えるお前の馬鹿さ加減に笑えてくる」

俺の言葉に、阿久津が睨みつけてくる。

（まだそんな余裕があるんだ？ まあ、その方が俺もやりがいがある）

「黙れ！！ なのはやフェイトは俺様のものだ！！！！」

「貴様こそ黙れ。あいつらはお前だけの物ではない」

「勝った気になるな！！ 俺様はまだ負けて——」

俺は立ち上がろうとする阿久津の両腕を切り落とした。

「がああああああ！！ 腕が！ 腕がああああ！！？」

「そうだ、叫べのた打ち回れ」

俺は阿久津の悲鳴に酔いしれていた。

「貴様……何者……だ！」

「お前らの様なウィルスを排除する存在さ。お前が強ければ強いだけ、俺の能力も高くなる。まあ、お前と違うのは10年もの間戦闘経験を積んだぐらいだが」

俺は見下すように答えた。

戦ったこともない素人に、俺が負けるなどそれこそありえないのだ。

「いい機会だから教える。戦いでは能力もそうだが、経験値や知能も非常に左右する。今までロクに戦ったことのないやつが、能力だけで最強の座に君臨できると思ひ込んでいる屑が、お前たち転生者さ」

「く……そ」

俺の蔑む言葉に、阿久津が毒を吐く。

「こんなことやっていいって言うのか！！ お前のやってることは殺人だ！！」

「殺人？ 違うね、貴様のような転生者に人権はない。よって俺は人殺しではない」

未だにそんな事を言える阿久津に呆れながら、俺はクリエイトを構

える。

「さて、それでは消えてくれ」

俺はそう告げると、クリエイトに魔力を流し込む。

「輪廻転生が普通の人の100倍長くなっちゃうけど、まあ天罰だ
と思っておきな」

「や、やめろ。なんでもする、お前の奴隷になる。だから――」

俺は阿久津の命乞いの言葉を無視する。

「それじゃ、死んで」

「やめ――」

俺はためらいなく阿久津に向けて剣を振り下ろす。

斬れるような音がするとともに、阿久津の姿はどこにもない。

「転生者反応消去。任務完了だ。お疲れ様」

「サンキュ」

俺は労いの言葉をかける執行人にそう言いながら、仮面とマントを
しまう。

これで100人目だ。

転生者がここにやってくるのはきりがない。

その主な理由がハーレムを作ろうというものだ。

能力の高さもさることながら、理由や動機性格が世界に対して害に
もなる。

俺が始末した100人の転生者だが、その99%は自分の能力に飲
み込まれたり、扱えなかったりと言うのがほとんどだ。

まあ、中には戦争体験者がいたりして色々と苦労したこともあったが。

（転生者は、全員消してやる）

俺はロストログアの封印との通達を聞きながら、再び決心するのであった。

第15話 出張任務終了と転生者（前書き）

今回もかなり短いです。

第15話 出張任務終了と転生者

ロストログアの封印が完了したとのことで、はやてから正式に出張任務の終了宣言がされた。

そして俺達はミッドチルダへと戻っていた。

【どうだった、久しぶりのここは？】

【……そうだな。気兼ねなくのんびりできた。ただそれだけだ】

俺の問いかけに、執行人が完結に答えた。

それは受け取り方を変えるとやや不満足と言う意味でもあった。

【何が不満なんだ？】

【……愚かな転生者が出たことだ】

俺の問いかけに、執行人はそう答えた。

まさしくその通りだ。

なぜにあのタイミングで転生者が現れるのか、非常にタイミングが悪い。

【真人、あの海鳴市に転生者が何人いると思う？】

【……わからない】

執行人の突然の問いかけに、俺はしばらく考えたが、答えが出なかった。

【千人だ】

俺は、その答えを聞いて愕然となった。

海鳴市の人口が何人かは分からないが、かなりの数だ。

【その中には静かに暮らしたい、前世での間違いを正したいというごくごく普通の目的を持った者もいる。だが……】

【あの男のように不埒な輩もいる。だろ？】

執行人の言葉を引き継ぐ形で、呟いた。

【ああ、今は也を潜めているが、いずれその牙を出すかは分からない。まあ、出てきても消せばいいだけの話なんだが】

執行人の言うとおりだ。

転生者が出てきても、ただ消せばいいだけの話。口にすれば簡単だ。

だが、消せば消すだけ考えてしまう。

（転生者は、どうして転生しようとするのか）

それほど死に対して恐ろしいのだろうか？

しかし、転生する時点ですでに死は迎えている。

だとしたら、一体何のために転生をするのであろうか。

それが俺がいまだにわからない疑問だった。

転生者、それは俺達の敵でもあるが、案外、人の醜い部分を映し出した存在なのかもしれない。

転生者の考える多くの事は偽善だ。

人を救えばその陰で悲しむ人がいる。

それを理解せずに、理想像を振りかざす。

これが偽善でないとすれば、それは一体なんなのであろうか？

【さあ、分からないな。考えるだけでも無駄だ。転生者如きの事を

いちいち考え無くてもいい】

俺の考えが分かったのか、執行人がそう告げた。
確かに、今の時点では、執行人の意見が正しいのかもしれない。

【転生者の考えを理解しなくてもいい。奴らは世界を汚す塵なのだから】

執行人の言葉に納得する俺は、すでに心が壊れているのであろうか？
しかし、何と云われても今の俺には執行人の言葉が胸にしみるのだ。

そんなこんなで、突然湧いて出てきた出張任務は幕を閉じるのであった。

第16話 ホテル・アグスタ（前書き）

いよいよホテル・アグスタです。

正直な話、ホテルの名前を『アナグスタ』と思い込んでいました。

それでは、どうぞ！

第16話 ホテル・アグスタ

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや」

出張任務から数日後、俺に、フォワードメンバー全員、健司や執行人そして隊長陣はヘリに乗り、部隊長のはやての説明を聞いていた。

「これまで謎だった、ガジェットドローンの製作者、およびレリックの収集者は現状ではこの男」

はやての言葉と同時に目の前にモニターが展開され、そこに一人の人物が映る。

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める」

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」

『はい!』

はやてとフェイトの説明に、フォワードメンバーが返事をする。

「ジェイル・スカリエッティ……………ねえ」

そんな中執行人は何とも言い難い表情で名前を呟いていた。

「で、今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ!」

モニターの前に移動したりインノ説明と同時に、モニターにはホテル・アグスタと思われる場所が映し出された。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストログアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い……との事で私達が警備に呼ばれたです！」

（こういう場合は違法な物が取引されていたりするんだよね）

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑になったりするし……油断は禁物だよ」

俺が思っていたことをフェイトが口にして注意した。

「あの、シャル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って？」

キヤロが指さすのは、シャルの横に置かれている五つの箱だった。

「ん？ ああ、これ？ 隊長達のお仕事着」

何だかもう嫌な予感しかなかった。

さて、俺達は今中ではやてとなのはと共に見回りをしているのだが。

「二人とも、ちょっといいか？」

「な、何かな？」

なのはがよそよそしく答えた。

ちなみになのはのこの様子は出張任務が終わってからずっとだと言
う事を書いておこう。

「仮装大会か？　ここは」

二人の姿は六課での制服ではなくドレスだったのだ。

俺と健司は黒のスーツを着せられた。

「そんなんやないって、こうしとけば管理局だとは思われへんやろ
？」

「確かに、そうだな」

俺ははやての説明に納得した。

「それじゃ、俺は念のために外の方に行くてくる」

「うん了解や。こっちはうちに任せてな」

俺ははやてにそう告げると、その場を去ろうとした。

「にあつてるよ、なのは」

その前に、俺はなのはの耳元でそうささやいた。

「ッ!？」

「ど、どうしたんや？ 顔が真っ赤やで？」

俺の言葉が相当効いたのか、どうやらなのは顔を赤くしたようだ。俺は、後ろを振り返らなかったから見えなかったが。

Side out

ティアナSide

私は警護をしながらスバルと念話で話しています。

【でも今日は、八神部隊長も守護騎士団も全員集合かあ】

【そうね、あんたは結構詳しいわよね？ 八神部隊長とか副隊長達のこと】

【うん、父さんやギン姉から聞いたことぐらいだけど、八神部隊長の持っているデバイスが魔導書型でその名前が夜天の書って言うこと。副隊長達とシヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している個人戦力だったこと、で、そこにリイン総長も合わされば……無敵の戦力ってこと。ま、八神部隊長の執事や能力については特秘事項だから詳しいことは知らないけど】

【レアスキル持ちの人はみんなそうよね】

私はスバルの言葉に、思わずそう言ってしまった。

【ティア、なんか気になるの？】

【別に】

スバルから聞かれたが、私はそう答えた。

【そう、じゃあまた後でね】

【うん】

スバルはそう言って私との念話を切った。

（六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ……八神部隊長がどんな裏技を使ったのかは知らないけど、隊長格全員がオーバーS、副隊長でもニアSランク、他の隊員達だって前線から管制官まで未来のエリート達ばかり、あの年ですでにBランクをとっているエリオにレアで強力な竜召喚師のキャロは、二人ともフェイトさんの秘蔵っ子。危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもあるスバル。そして未知数の強さを持つ山本副隊長と井上副隊長）

頭の中でそう考えると、どうしても孤独感を感じてしまう。

（やっぱり、うちの部隊で凡人は私だけか……だけど、そんなの関係ない！ 私は立ち止まるわけにはいかないんだ）

そして私は再び自分の心にそう言い聞かせるのでした。

S i d e o u t

【前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ01の総合管制と合わせて私、シャルが現場指揮を行います】

突然伝えられたシャルの通信。

「どうやら、外の方にガジェットが出現したようだ」

執行人の言葉を聞いて、俺はシャルに念話を飛ばす。

【シャル、俺と執行人も外に出ます】

【分かりました。ガジェットのデータをそっちに送ります！】

シャルから送られてきたデータによると、森の部分に集中している。

「執行人、俺は出入り口のあたりから遠距離攻撃をする」

「OK、僕はお前の補佐だな」

俺と執行人はクリエイトを手にながら表に出る。

「ブレイクイヤー・マルチショット」

そして表に出ざまに遠距離用に10本の矢を具現化させて構える。

「ターゲットロックオン。ファイアー！」

そしてガジェットに照準を合わせて遠距離攻撃を行った。

（この調子でいけばいいんだけど）

そう思いながら先にある森の方に移動した。
防衛ラインには新人たちがいるはずだ。

だとすれば俺は、前に出て後ろに敵陣がいかないようにしなければいけない。

そして森に入ってしばらくした時だった。

「ツと、出てきたな。これは噂の？型か？」

そう呟いた瞬間、ガジェットがこちらに向けて光線のようなものを
出して攻撃してきた。

「ブレイク・イヤー！！」

俺はそれを避けつつ、矢を射る。
だが……

「弾かれた！？」

「これは………気を付けろ！ こいつは有人操作だ」

驚く俺に、執行人が注意を飛ばす。

（だったら！）

俺は高速でガジェットの目前まで移動する。

「悪魔断拳！！」

そしてガジェットに向けて3回連続で殴りつけると後方にジャンプ

して回避する。

その瞬間、ガジェットは大きな爆音を上げながら爆発した。

「真人、後ろに行くぞ。このままだと防衛ラインを越えられる」

「了解！」

俺は執行人の警告に頷き、急いで後ろに引き返した。

S i d e o u t

健司 S i d e

「はあああ!!」

俺はガジェットの一機を剣で切り付ける。

すると、ガジェットは爆音を立てて爆発した。

だが、俺の周りにはガジェットが大量にあった。

つまり、俺は囲まれていたのだ。

(クソッ! こうしてる間にもティアナの野郎がやらかすのに!!)

俺は心の中で舌打ちを打つ。

この先の展開を知っているからこそ、俺は慌てているのだ。

そして俺は、再びガジェットを討伐するのであった。

S i d e o u t

ティアナSide

（証明するんだ）

私はカートリッジをロードしながら自分の心に言い聞かせます。

（特別な才能やすごい魔力がなくなつて、一流の隊長達がいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって！）

私の周りに橙色の魔法弾が具現化します。

「私は……ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

今スバルが囷になって攻撃をひきつけている間に、私は攻撃の準備を整えます。

『ティアナ！？ 四発ロードなんて無茶だよ！ それじゃ、ティアナもクロスミラーシュも！』

「撃てます！」

『イエス』

「クロスファイヤー……」

ロングアーチからの忠告を無視して私は……

「シュート！」

大量の誘導弾をガジェット達に直撃させて行きます。

「だああああ！！！」

誘導弾に加え、直接魔法弾を撃ち込んで、全機を破壊しようとしたが一体のガジェットを狙った球が逸れ、その先にいたのは……スバルでした。

「スバル、危ない！！」

私はそう言いますが、魔法弾はスバルの目の前にまで来ていました。私は、最悪な事態を予想して目を閉じてしまいました。

「神性典・第2章、無を促す光の環！！」

私の耳に、その声が聞こえてきました。目を開けると、そこにいたのは。

「山本……副隊長？」

紫色の杖を手にした山本副隊長でした。

S i d e o u t

俺は、上空を飛びながら防衛ラインへと向かっていた。

（あれは、スバルのウィングロードか？）

しばらくすると、目の前に青い何かが見えてきた。

それを俺は、瞬間的にウィングロードだと認識できた。
その上を走るスバルに青い光線が放たれる。

【強力な魔力反応だ。これはティアナの様だな】
「ティアナなのか？」

俺は嫌な予感を感じた。

なので、俺はさらに速度を上げる。

そしてその予感の的中してしまった。

俺が見たのは、スバルに迫る一発の魔法弾。

それは、ティアナのクロスファイアーだった。
咄嗟だった。

俺はスバルの前方に出ると紫色の杖を掲げる。

「神性典・第2章、無を促す光の環！」

その言葉と同時に、前方に広がった黄緑色の円陣にティアナのクロスファイアーが当たった瞬間、それはまるで最初からなかったかのように消えた。

（出来たの………か？）

俺は自分が使った技の感傷に浸っていた。

「山本……副隊長？」

それは聞こえてきたティアナの声によって遮られた。

「何をしてるんだ？ お前たち」

「ッ！？」

俺の静かな声に、ティアナは息をのむ。

俺は今まで一度も大声でどなり散らしたことはない。

「あ、あの。これはコンビネーションの一環で」

「コンビネーション？ なるほどね、だがいくらコンビネーションだとしても容認は出来ないな」

「お、おい何やってんだよ！」

そんな時、ヴィータがやってきた。

「ヴィータ副隊長。この二人の配置を裏にしてください」

「な、何があつたんだよ！」

俺の要求にヴィータが聞いてくる

裏に配置を変えと言うことは、事実上の戦力外通知になる。

「詳しい事情は後で説明しますが、危険行為を確認しました。こうしている間にも事態はひっ迫して行きます。早急に対処を」

「……二人とも、山本の言うとおりに裏の方へ移動しろ」

二人は、ヴィータの指示を素直に聞いて裏の方に歩いて行った。

第17話 すれ違ふ心

あの後、ガジェットを全機破壊した俺達は、ガジェットの残証物の回収をしていた。

そんな中、俺はなのはに連れて行かれるティアナを見た。

(………… ティアナがなのはの言葉を聞いてくれればいいんだが)

俺は心の中でそう思う。

仲間割れは起こしたくないのが、俺の本心だ。

今俺達がやるべきことは、任務を無事にこなしていくことだ。
ならば…………

(なら、俺は何をすべきなんだろうな)

つつい考えてしまうこと。

俺はスパイ活動をしている。

この活動は平和のためだと思う自分もいれば、はやてへの罪悪感を
感じる自分もいる。

つついはやてのいる目の前で土下座をしてすべてを懺悔をしたく
なってしまう。

それが出来れば、俺はどれだけ幸せなのだろうか。

(でも、悩んではいけないんだよな)

俺はなるべく早く、結論を出そうと思うのであった。

夕暮れ時、六課に戻った俺は、森の木に寄り掛かるようにして座っていた。

「ふう……」

そこは、何気に俺の休憩スポットになっていた。

（それにしても、なんでティアナは無茶を……）

俺の感じたティアナの姿からは到底想像もできないミスだった。ティアナの精密射撃の精度はすごいと言うのは俺も知っている。だとすれば、あのような凡ミスを犯すだろうか？

（それに何だか焦っていたような……）

俺は目の前にモニターを展開すると管理局のデータベースにアクセスする。

そして閲覧したのは、ティアナのデータだった。

俺の知りたい答えが、そこにあるような気がしたのだ。

「別にこれと言った点はない……ッ!？」

俺はとうとう見つけた。

経歴の備考欄に書かれていた一文を。

『ティアナ・ランスター氏の兄ティード・ランスター死去。享年21』¹

俺はすぐに彼について調べた。

名前：ティード・ランスター

階級：一等空尉

所属：首都航空隊

年齢：21（死去）

「逃走中の違法魔導師を追跡中に殉職か……しかしそれだけでもない様な気が……」

俺はどんどん詳細データをあぶりだしていく。
やがて……

「これは、音声データ？」

俺は、極秘事項の音声データを見つけ、それを開いた。

『えー、ティード・ランスター氏の件に関しては、犯人を追いつめながらも取り逃がすのは、首都航空隊の魔導師ではあるまじき失態であり、たとえ死んでも取り押さえるべきであると申し上げたい所存でございます』

聞こえてきたのは、死人を冒瀆するようなコメントだった。
おそらく、彼の上司なのだろう。

しかし、えげつなく冷酷な言葉だ。

他にも『任務を失敗するような役立たずは死んで当然だ』と言う極悪非道なコメントもあった。

「こんな事を言われてたら、ああもなるな」

俺はようやく理解できた。

彼女がそこまで無茶をする理由が。
そして考えた。

（俺の時は、プラス評価だったけど、もしそれが……）

あの事故の後、俺の階級は上がり、そして周りから褒め称えられた。

”エース・オブ・エースを、身を挺して守った騎士のような魔導師”と。

もしそれが、彼のようなコメントだったら、俺はどうなっていたの
だろうか。

「……………」

俺は目を閉じて考え込むのであった。

「ん……………」

俺は不意に意識がはつきりとした。
どうやら考えている時に寝ていたようだ。
すぐさま目に魔力を通して、視力を得る。

「夜……か」

辺りはすでに真っ暗だった。

そんな時、草を踏むような音がしたので、俺は立ち上がった。

「誰だッ!!」

「お、俺だよ」

姿を現したのは、健司だった。

「どうしたんだよ？　こんなところで」

「俺はちよつと気になることがあってな。そう言うお前は何でここに
いる？」

俺の問いかけに答えながら、健司は尋ねてくる。

「休憩してたら寝ちまつたんだよ」

「時々抜けてるよな。お前って」

健司の言葉に、俺は”うつさい”と答えそっぽを向く。

そんな時、三人目の足音がした。

「あれ、山本副隊長に、井上副隊長じゃないですか。どうしたんですか？　こんなところで」

姿を現したのは、ヴァイスだった。

「ティアナの様子を見に来たんだ。まだやってるのか？」

「ああ、戻ってからずっとだ。俺の言葉も聞きやしねえ」

健司の問いかけに、ヴァイスがお手上げと言った様子で答えた。どうやら、ティアナはいまだに無茶をしているようだった。

「だったら、ティアナは俺達に任せてくれないか？　これでも上司だし」

「……………そんじゃ、よろしく頼むぜ」

俺の言葉にそう言い残し、ヴァイスは去って行った。

「健司、行くんでしょ？」

「ああ」

俺と健司はヴァイスが出てきた方へと向かって行く。

彼女の姿はすぐに見つかった。

白色の球体にただひたすらにクロスミラージュを向けるティアナ。俺はそんな彼女に声をかける。

「訓練とは精が出るね」

「……………山本副隊長」

突然かけられた俺の声に、ティアナは疲労からか息を切らしながら俺の方を見てくる。

「何の用ですか？」

「今日ミスシヨットしたばかりだろ。悔しいのは分かるがよ、詰め込んでも意味はない。今日は一日ゆっくりとして明日からまた頑張ると良い」

冷たいティアナの声に、俺は明るく話す。

「詰め込んで練習しないと意味がないんです。凡人な物で」

「そうか？　俺は凡人だとは思わねえけど、そんなんでいくらやつても無駄だからやめとけ」

ティアナの答えを聞いた健司が彼女にそう返した。

その瞬間、ティアナがこつちを睨みつけるように見てきた。

「なんですか！　私を見下してるんですかッ！？　山本副隊長はにやにやして、そんなに凡人を見下して楽しいんですか！！」

ティアナが喚き散らす。

「違う！　俺は決してティアナを見下しては―――」

「ええ、そうでしょうね！！　あなたのような天才に、私の様な凡人の気持ちなんか分かるわけないですよね！！！！」

ティアナの言葉に、俺はショックを隠せなかった。

俺はただ仲間割れを起こさないようにと笑顔で話していただけで、そのようなことはない。

（言葉で通じ合える時代は終わった……か）

執行人の言葉を思い出した。

それは俺が一番認めたくないものであった。
だからこそ、俺は限界だった。

「おい、ティアナ！ そんな言い方はねえだろ！ こいつはお前の
ためを思つて——」

「健司、いいよ」

俺はまくし立てる健司の言葉を遮る。

「だが——」

「良いつて言つてんだろ！！」

「ッ！？」

健司が信じられないと言つた様子で、俺を見ってくる。

そう言えば、声を荒げるのはこれが初めてだった様な。

「確かに俺には凡人の気持ちは理解できない。だがな、ティアナ。
お前は天才の気持ちは分かるのか？」

「え？」

ティアナが驚いた様子で声を上げた。

「まさか天才だから何の苦悩もないと思つてた？ だとしたら相当
なバカだよ、お前は。気持ちは分かりっこない？ それはそつちじ
やねえのか？」

俺は心の奥底でせき止めていた想いが口を出て行く。

「俺が下半身不随の後遺症を負った時の気持ちが、お前たちはわかるのかよ！！ 分かるわけないよな、だってお前は俺じゃないもん

――
「真人！ そこまでにしておけ」

俺の罵声を遮るように体を揺らす健司。

「ッ！！ もう良い。好きにすればいいよ」

俺は自分の言っていたことの愚かさに気付き、そう言い捨てるとそのまま二人に背を向けて歩き出す。

（俺も、まだまだ……だな）

今まで言わないようにしていた気持ちがこみ上げてくる自分の未熟さに、俺は情けなかった。

「じゅめん」

誰にも伝わらないその謝罪は、俺自身の罪悪感から逃れるための物だったのか、それは俺にもわからない。

そして俺は隊舎に戻るのであった。

『定時連絡。本日、ホテル・アグスタにて警護任務があった。途中ガジェットの襲撃があったが新人や部隊長の活躍で全機撃墜、任務

は無事成功した。新人たちの成長をうかがい知るものとなった』

——俺は何時まで、自分を偽ればいいのかだろうか？——

第17話 すれ違う心（後書き）

次回はついに魔王様降臨。

はてさて、仕上げましょうか……

第18話 衝突

あれから数日間、ティアナは相変わらずオーバーワーキングを続けていた。

さらにはスバルまで参加するほどだ。

「なあ、本当にいいのかよ？」

「……………」

上空から二人の朝練を見ている俺の横にいた健司が俺に問いかけてくる。

「あの二人のやろうとしていることは、完全になのはの教えに反しているぞ」

「それが、二人が考えた結果であれば俺はそれを尊重する。それに一度ばかり大きくぶつかった方がいいんだ。その方が手っ取り早い」

俺の中では、ティアナ達となのはをわざと衝突させて話し合いでの解決に持っていこうと考えていたのだ。

俺の様な第三者が言うよりは彼女の方がより説得力があると考えたからだ。

「ま、お前がそう言うんなら何も言わないが……………」

この時、俺は気付いてなかった。

この俺の選択が後に、最悪な事態を招くことになるとは。

それはある日の午前中の訓練の時の事。

「さーで、それじゃあ午前中のまとめ、2on1の模擬戦やるよ！
まずはスターズからやろうか？ バリアジャケット、準備して！」
「はい！」

なのはの指示にティアナとスバルは、返事をする。

「エリオとキャラはあたしと見学だ」
「はい」

ヴィータはエリオとキャラを連れて戦闘区域外の、近くの廃ビルの屋上へ向かった。

その間にティアナとスバルは、バリアジャケットを展開して戦闘準備をする。

「やるわよ！ スバル！」

「うん!!」

ティアナの言葉に、スバルは元気に返す。
俺はそんな二人の様子を冷やかな目で見ていた。

「真人、早く行くぞ」

「ああ」

健司の促す声に、俺はそっけなく返事をする、三人が向かった屋上の方へと向かった。

廃ビルの屋上へたどり着き扉を開けると、そこにはヴィータ、エリオ、キヤロがいた。

そして模擬戦が始まってからしばらくした後で、フェイトがやってきた。

「ああ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「フェイトさん！」

ビルの屋上に着いたフェイトに挨拶をするエリオ。

「私も手伝おうと思ってたんだけど」

「今はスターズの番」

ヴィータはフェイトを見て、現在の進捗状況を伝えた。

「……ホントはスターズの模擬戦も引き受けようと思ったんだけどね」

フェイトはそう言うと言った上空にいるなのはを心配そうに見上げた。

「ああ。なのはもここ最近は訓練密度が濃いからな。……少し休ませねーと」

ヴィータもなのはの最近のオーバーワークを心配しているようだ。かくいう俺もだが。

何せ、あの事故の時もなのはは過労状態だったのだから。

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニタに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形チェックしたり」

「なのはさん……訓練中も、いつも僕達のこと見ていてくれているんですよ……」

フェイトの言葉を聞いたエリオは感慨深げに語る。

「ほんとに……ずっと……」

キヤロもエリオに賛同するように嬉しそうなのはを見ている。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータが下にいるティアナを見てつぶやいた。
ティアナの周囲に10個程の魔法弾を展開している。

「クロスファイアー……シュート！」

ティアナは魔法弾をなのはに向けて放つ。
だが、その魔法弾はかなりスピードが遅い。

「……？　なんかキレがねーな」

ヴィータはティアナのクロスファイアーに、いつもの勢いが無いことに首を傾げていた。

「コントロールはいいみたいだけど……」

「いや、それにしたって……」

そんなヴィータにフェイトは正確なコントロールの点を指摘するが、それでもヴィータは釈然としていない。

（速度を落として、命中率を上げたのか？　だとしてもあれだと避けられやすくなるのが落ちだ。と言うことは）

俺は一人で考察していきついたのは、”次の手への布石”と言う事だった。

にしてもあんなやり方じゃ、なのはには……

そしてクロスファイアーは、飛んで回避するなのはの後ろを追尾し続ける。

すると、なのはの前にスバルのウィングロードが展開する。

なのははとっさに魔法弾を数発展開させる。

そしてなのはは迫り来るスバルを確認する。

「……………フェイクじゃない？ 本物！？」

なのはは即座に魔法弾を、前方のスバルに向けて放つ。

だがスバルは飛んでくる魔法弾をシールドで防御はするが突進をやめる気配はない。

何個かの魔法弾は、スバルのシールドを突破し、スバルの体をかすっていく。

そして、全ての魔法弾を捌ききると、スバルはなのは目掛けてリボルバーナックルを振りかぶった。

「うおりゃあああッ！！」

なのはは咄嗟にレイジングハートでシールドを展開し、スバルの攻撃を防御する。

一方のスバルは力押しで、なのはのシールドを破ろうとしているのか、回避するそぶりを見せない。

勿論だが、今の様な戦い方はなのははおろか、俺も教えていない。

なのははスバルの無茶な突進に顔を顰める。

そしてなのははレイジングハートを振り、スバルを弾き飛ばす。

「きゃあああッ！？」

弾き飛ばされたスバルは、なんとかウィングロードの上に着地する。

「こらスバル！ ダメだよ、そんな危ない軌道！」

なのははスバルを叱りながらも、ティアナのクロスファイアーを避け続ける。

「すみません！ でも、ちゃんと防ぎますから！！」

スバルの言葉に、なのはは怪訝な顔をする。

（防ぐとはどういう意味だ？ それに、ティアナの奴はどこに行った？）

俺はティアナの姿が見当たらないことに気付き、慌てて見渡す。すると廃ビルの上から光が発せられた。

そこには、ティアナが砲撃準備し、なのはをロックしている姿があった。

「砲撃？！ ティアナが！？」

その様子にフェイトは驚いている。

俺の記憶の範囲内では、そのような物を教えていた記憶はない。元から持っていたと言う可能性もあることにはあるが。

「おう！！」

スバルが答えるのと同時にリボルバーナックルのカートリッジをロードし、マッハキャリバーがうねりを上げると、マッハキャリバーの突進力で一気になのはとの距離を詰めた。

スバルは、リボルバーナックルを振り上げ、なのは目掛けて体ごと突撃する。

対するなのはは魔法弾を展開するが、スバルはそれ等を全て避け、拳の届く距離まで近づき、リボルバーナックルを振りかぶった。

だが、なのはもレイジングハートでシールドを展開しリボルバーナックルの攻撃を防ぐ。

両者の魔法がぶつかり合い、火花を散らせる。

なのははスバルの攻撃を防御しつつ、ティアナの方を見る。すると、砲撃準備をしていたティアナは、その場から消えてしまった。

つまりは、幻影と言う事だ。

「あっちのティアさんは、幻影!？」

「本物は!？」

キヤロとエリオが慌てて周りを見回す。

俺も辺りを見回してティアナの姿を探す。

だが、彼女の姿はすぐに見つかった。

そう、なのは達の頭上に展開されたウイングロードを走るティアナの姿が……

(なるほど、そういう事か)

俺はようやく想像が出来た。

おそらくは頭上からの接近戦をしようとしていると。

ティアナ達の早朝特訓は、近距離戦を想定している。

そんな俺の予想を肯定するように、ティアナの持つクロスミラージュの銃口部分から魔力の刃が現れた。

そして、その刃をなのはに向けて飛び込む。

「一撃必殺! でええええいつ!！」

次の瞬間、三人のいる場所から爆煙が上がった。

「なのは!？」

爆風で俺達は目をかばっていた。
フェイトはなのはの心配をしていた。

爆煙が晴れると、そこには片手でリボルバーナックルを受け止め、もう片方の手ではクロスミラージュの魔力刃を素手で掴んでいるなのはの姿があった。

何かを言っているようだが、俺には聞こえなかった。

するとティアナは、クロスミラージュの魔力刃を解除し、なのはから離れた所にあるウイングロードに飛び退いた。

そして、体制を立て直し、クロスミラージュをツーンハンドで構え、カートリッジをロードすると、ティアナの前に魔法陣が展開し、砲撃準備をしていた。

「私は！ もう……誰も傷つけないから！！ 無くしたくないから！！」

ティアナは涙を流しながら、なのはに自分の思いをぶつける。

「だから！ 強くなりたいんです！！」

ティアナのその独白に、俺は頭を殴られたような衝撃が走る。
俺はようやく気付いた。

（何をやってるんだよ。俺は）

俺のやっていることは、愚かな事であったと言う事に。
俺は、彼女の思いを理解もせず、ただ兄が役立たずと言われたことを気にして強くなろうと思っていると決めつけていた。

「うあああああ！！ ファントムブレ——」

ティアナが砲撃魔法を言い終わる前に、おそろくクロスファイアーなのはは魔法弾をティアナに向けて放った。

そして、それはティアナに命中し、爆発した。

「ティア……！？——！？」

スバルはティアナの所へ駆け寄ろうとしたが、その体にはバインドがかけられていた。

スバルはなのはを見るが、なのははティアナから視線を離さない。

爆煙が晴れかけると、そこにはフラフラ状態となっているティアナの姿があった。

その様子は、今にも倒れそうであった。

「健司、頼むぞ」

「ああ」

俺は健司にそれだけ伝えると、急いでティアナの前まで向かった。そんな時、なのはは無情にも二発目の魔法弾をティアナに放とうとしている。

「なのはさん！-」

スバルの悲痛な叫びも空しく、なのはの指先から魔法弾が発射された。

（間に合え！！）

そして、俺は間一髪でティアナの前にたどり着くが、シールドを展開

開するような余裕はなかった。

「はああ！！！」

俺は右手に魔力を込めて魔法弾を跳ね飛ばす。

「ぐうう！！？」

同時に右手に痛みが走る。

それも当然だ。

いくら魔力を込めて補強したと言っても、生身の体同然だ。

「一体なんの真似かな？ 真人君」

なのはがこつちを睨みつけながら問いたです。

その眼には光がなく、まるで魔王を彷彿とさせるような姿だった。

俺は右手の痛みをこらえながら俺はなのはを見据える。

「何の真似って、これ以上の暴行は認められないからな」

「これは暴行じゃないよ？ 頭を冷やすための教導だよ」

俺の言葉に、なのははそう切り返してくる。

「教導？ 俺には教導には見えない。ティアナのやった危険行為に
対してならあの一発で十分だ。二発はやりすぎだ」

「何が言いたいのか？」

俺の言葉に、なのはが眉を顰めながら聞いてくる。

「つまり、お前のやっていることは自分の言うとおりにしてくれな

いから暴力で言う事を聞かせる子供だっという事だ」

「そんな言い方、いくら真人君でも許せないよ。この二人は私の教えに背いたんだよ？」

「だったら、お前はちゃんと伝えたのか？ この教導の意味を」

俺はなのはに問いたです。

「……………」

「その沈黙は伝えていないと取るぞ」

俺はなのはにそう告げると、言葉が続けた。

「どんな優秀な人間でも、会話もしないで相手の本心を理解できるなんてことは出来ない。だからこそ、話し合いつて必要なんじゃないのか？」

「……………」

「それをしないで思いが伝わるだなんてことは、絶対にない！！それはお前が一番知っているはずだ」

「うるさい！！！」

俺の言葉になのはは大きな声で叫ぶ。

「真人君も、頭冷そっか」

そう言って俺にレイジングハートを突き付けてきた。
本人はやる気だ。

「愚かだ」

俺は口を継いで出てきた。

「何かな？」

「話し合いもせずに、自分の理想が伝わると思い込んでいるお前がだ」

俺の言葉を聞いたなのは野視線がさらにきつくなる。

「まあ、その条件を当てはめるのであれば、俺も十分愚か者だけど相手の気持ちを考えずに人任せにした俺は、偽善者と言っても過言ではない。だからこそ

「俺は全力を持ってお前を止める！！！」

そして、俺はクリエイトを取り出す。

姿はいつもの青いシャツに銀色のジャケットのバリアジャケットではなく、転生者の狩人である黒一色のマントだ。

そして、俺となのはの戦いがいま幕を開けた。

第18話 衝突（後書き）

変なところで区切ってますみません。
次回は、対なのは戦です。

第19話 激突する二人

「アクセルシユート!!」

「っと! ライトフレイヤー!!」

なのはのアクセルシユートを躲し、なのは目がけて矢を5本射る。

『p r o t e c t i o n』

レイジングハートにより自動展開されたシールドに、俺の射た矢が激しくぶつかり合う。

なのはは、それを上空に移動して躲そうとするが、俺のライトフレイヤーは追尾能力もあるのだ。

よって、無駄だ。

そう思った瞬間だった。

魔法弾によって、矢は真つ二つにへし折られた。

(なるほど、俺が躲したのを防御として使ったのか)

俺は即座に納得すると、次の手を打つ。

だが……

「甘いよ、真人君」

「ちいッ!」

俺に迫ってくるのは、5発のアクセルシユート。

「シールプロテクション!!」

俺は慌てて防御魔法を展開する。

「ツく！」

言葉には表しがたい圧力が、俺を襲う。

なんとかそれに耐えきれた俺だが、相手は待ってくれなかった。

「デイベイン、バスター！！！」

「ッげ！？」

なのはの十八番である『デイベインバスター』が俺に向けて放たれた。

シールプロテクションを展開する余裕もなく、俺はとっさにクリエイトを杖形態に戻すと前方……迫りくる桃色の砲撃の方へと掲げた。

「神性典・第1章、転輪せし円陣！」

俺の目の前に白銀の円が展開する。

それと同時に、デイベインバスターが円に触れた。

その次の瞬間、俺に迫っていたデイベインバスターはなのはの方へと方向を変え向かって行く。

「なッ！？」

その光景に、なのはは驚きを隠せ無かったようだ。

だが、それでも経験によりなのははシールドを展開して防御する。その為に土煙が立ち上がる。

「もう終わりにしないか？」

土煙が晴れかかった時、俺は何はにそう切り出す。

さつきはああも言ったが、実の所仲間同士と争うのは嫌なのだ。其れゆえの停戦勧告であった。

だが………

「馬鹿にしないで！！！」

なのはの答えは、NOであった。

俺は致し方ないとばかりに、矢を射ようとした時だった。

「な、バインド！？」

突然の桜色のバインドに、俺は両腕両足を大の字に拘束された。

そして大きな魔力の流れを感じた終えが、恐る恐るその方向を見ると、ものすごく巨大な桜色の魔力球が出来つつあった。

「まさか、あれは………」

俺はそれに見覚えがあった。

彼女を白い悪魔とまで言わしめた要因の一つにして、彼女の必殺技。その名も

「スターライト・ブレイカー！？」

であった。

S i d e o u t

健司Side

「あれはまずいぞ!」

「いくらなんでもあんなのを食らえばただじゃすまないよ!」

なのはが展開する『スターライト・ブレイカー』を見た二人が慌てふためく。

その中、俺は魔力で構成した弓に、真人から渡されていた矢をセツトしていた。

「執行人、四人を俺から離して」

「了解」

俺の頼み事に、執行人は四人を俺から少し離れた端の方に移動させた。

「何をするんですか、執行人さん!」

「お前達はそこから動くなよ? 死にたくなければな」

俺は徐に上空のやや浅いところに狙いを定めると、矢に魔力を注ぎ込む。

そして俺は、真人から矢を渡された時の事を思い起こした。

それは今日の朝の事であった。

「何だよ？　これ」

俺は先が赤い矢を受け取りながら尋ねた。

「それは魔導師の能力を完全に消す”魔導殺し”の矢の効果を弱らせたものだ」

「大丈夫なのか？」

俺は真人の説明に少しばかり不安になる。

「大丈夫だ。その矢は着弾した場所から半径5キロ圏内で発動中の魔法を停止し、魔導師については強制パージされる」

「だけど、どうしてこんなものを俺に？」

俺は疑問に思ったことを真人に投げかける。

「もし、俺が仲間と争うようなことになったら、これを使って欲しい」

「それって、まさか」

「俺もそういう事は避けたい。だが、万が一にもそうなった時の保険だ」

俺は真人の言わんとすることが理解できた。
この先、なのはの魔王降臨があつたはずだ。

とすれば、それを止めようと真人が出でば戦いに発展するのは否定できない。
だからこそ、俺はその矢を受け取った。
そして、今に至るのだ。

（出来れば、解決してくれればいいんだけど）

俺は、そんな事を考えながら魔力を注ぐのであった。

S i d e o u t

（どうしたものか）

俺は必死に考えをめぐらす。
今俺は両手を拘束されている。
今からバインドを壊そうとしても、発射までには間に合わない。
同じ理由でシールドなんてものも神のようなものだ。

だとすれば……

（あれしかないか）

それは、神性典の第2章に当たる『無を促す光の環』だ。

（これ、前は出来なかったんだけどな）

そう、この神性典は執行人が扱える物で、本来は俺には扱うことは不可能なのだ。

しかし、なぜか俺はそれの第2章までを扱うことが出来るようになったのだ。

（どうしてだろう？）

そんな事を思っていた瞬間だった。

「スターライト……」

どうやら魔力のチャージが完了したようだ。
と言うより、でかいな。

「ブレイカー！！」

そしてとうとう放たれた。
俺に向かってくる収束砲。

「神性典・第2章、無を促す光の環！！」

そして俺は、神性典を行使した。

膨大な魔力が俺の中に入り込んでくる。

「ッぐ!?!」

その膨大な魔力量に、俺は顔をしかめる。
いくらなんでもこれはかなりきつい。

俺は、必至に意識を保とうとする。

未だに、なのはの込めた魔力量の半分も吸収していない。
魔力は確かに必要だが、莫大な量の魔力は本人を傷つける刃となるのだ。

(もう………限界)

俺は、重圧に耐えきれなくなったため、技を止めた。

魔力の吸収は止まったが、残された4割弱の魔力で構築された収束砲は『デイバインバスター』へと姿を変え、俺へと向かってきた。
俺はそのまま意識を手放してしまった。

その際に俺が見たのは、赤い矢によってすべてが消去される光景だった。
デリート

第19話 激突する二人（後書き）

何とも締まらない最後ですみません

第20話 緊急出動と深まる溝

俺の意識が戻ると、場所を確認するために目に魔力を通す。

「ん……」

視力を取り戻した俺が見たのは、無機質な天井だった。

そして周りを見渡して、置かれている器材から医務室であることが分かった。

医務官であるシャマルがいないことから、用があった出ているのだと解釈した。

上半身を起こして、腕の力でベッドの端の方に移動すると、壁に掛けられていた黒いステッキを手にベッドから起き上がった。

ベッドメイキングをしている最中、出入り口のドアが開く音がしたので振り返ると、そこには健司の姿があった。

「お、目が覚めたみたいだな」

「ああ、おかげさまでな」

健司の言葉に、俺はそう答えるとベッドメイキングを続ける。

「シャマルが怒ってたぞ、魔力回路に負荷をかける戦いしていたからな」

「げっ!? こりゃ後でお説教だな」

「ははは、諦めろ」

俺の表情を見た健司が笑いながらそう言う。

他人事だと思ってるな。

「ところで……だ」

「……………こいつの事か？」

健司の声色がいつになく真面目なものになったので、俺はその内容に検討を付け親指で俺の横……カーテンがかかっている場所を指した。

おそらくそこにはティアナがいるはずだ。

「それもあるが、あの子の事を説明しないといけないだろ」

健司の言葉に納得しながら、俺は事の顛末を聞いた。

まず、あの後魔導殺しもどきの矢によって、強制解除に成功した。ただ俺とティアナの場合は気を失っていたため医務室に運ばれた。

「なのはかなり思いつめてたぞ。自分のせいでお前に怪我をさせたってな」

「……………」

俺は健司の言葉に、何も言えなかった。

健司の言葉の裏には、話し合えと言っているのは丸わかりだ。

そして俺は居た堪れなくなり、医務室を後にする。

空模様からもう夕方だろう。

俺は屋上に移動すると、オレンジ色に染まる空を見上げていた。

それからどのくらいの時間が経ったのか、もう辺りは真っ暗だった。そんな時、アラートが鳴り響いた。

「こんな時に緊急出動かよ」

俺は愚痴りながら、ロングアーチのいる管制ルームに向かった。

「航空？型、4機編隊が3体、12機編隊が1体」

「発見時から変わらず、それぞれ別の場所で旋回機動中です」

どうやらガジェットが現れたようで、モニターにはただぐるぐると同じ場所を旋回しているガジェットの姿が映し出されていた。

「場所はなんにもない海上。レリックの反応もなければ、付近には海上施設も船もない・・・」

「まるで撃ち落としに來いと誘っているような……」

「そやね……」

ロングアーチの副官であるグリフィスさんの言葉に、はやても頷いた。

確かにそう言う印象も持てなくもない。

「テストロッサ・ハラOWN執務官、どう見る？」

「犯人がスカリエッティなら、こちらの動きとか航空戦力を探りたいんだと思う」

はやての問いかけにフェイトが答えた。

「この状況ならこっちは超長距離攻撃を放り込めば済むわけやし…

…」

「一撃でクリアですよ」

突然はやての横から出てきたラインが、元気いっぱいに答える。

「うん。でも、だからこそ奥の手は見せないほうがいいかなって」

「まあ実際、この程度のことです隊長達のリミッター解除いうわけにもいかへんしな……」

確かにわざわざ相手がこっちの戦力を見たいと思っているのにそれに乗る必要もない。

「高町教導官と山本二等空佐はどうやる？」

「こっちの戦力調査が目的ならなるべく新しい情報を出さずに今までと同じやり方で片付けちゃう、かな」

「俺も同じく。相手の思惑に乗る必要もないだろうし、今まで通りにやるのが一番かと」

俺となのはは、お互いに意見を述べる。

そしてはやてはグリフィスさんと頷くと

「それで行こう」

そう指示を出すのであった。

場所は変わってヘリポート前。

そこには部隊長を除く隊長陣と、フォワードたちの姿があった。

「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長とヴィータ副隊長、山本二等空佐の四人」

健司は念のためと言う事で、この場に残ってもらうことにした。

「みんなはロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。指揮を頼むぞ」

「はい」「」

なのは達の言葉に元気よく返事をするフォワードだったが、ティアナだけは浮かない様子であった。

「ああ、それからティアナ……ティアナは出勤待機から外れてこ
うか」

「えっ……！？」

それを見たのはティアナに出勤待機からの除外を伝えた。

確かに今の様子では、任務に出たところで彼女を命の危険にさらす
ことは目に見えている。

「その方がいいな。そうしとけ」

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし……」

ヴィータもそれに賛同し、なのはは理由を口にする。

「……言うことを聞かない奴は、使えないってことですか？」

「はあ……自分で言ってるわからない？ あたりまえのことだよ、
それ」

ティアナの言葉に、なのはは表情を厳しくして答える。

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だって、ちゃんとサボら
ずやってます。それ以外の場所での努力まで教えられたとおりじゃ
ないとダメなんですかつ！？」

ティアナは涙をにじませながらなのはに詰め寄るが、言っているこ
とに俺は納得も出来ない。

「私はなのはさんや山本二等空佐たちみたいにエリートじゃないし、
スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルもない。
少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんなれない
じゃないですかっ！？」

俺は我慢の限界を超えて右手を強く握りしめるとティアナの方に向かう。

そんな時、鈍い音が響いた。

その音の主は……

「健司？」

右手を振りかぶっていた健司だった。

「餓鬼の駄々に付き合うから付け上がる。出撃するものはすぐに出撃しろ。ヴァイス陸曹、もう行けるか？」

「乗り込んでいただけりゃあ、すぐにでも」

健司の問いかけに、ヴァイスはへりから顔を出して答える。

【こっちは任せておけ】

「三人とも、ここは井上一等空尉に任せて出撃しよう（分かった）」

「あ、ああ」

健司の念話に答え、俺達はへりに乗り込んで出撃するのであった。

（それにしても、健司があそこまで怒った顔、初めて見たな）

俺は、向っている道中、そんな事を思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6394w/>

魔法少女リリカルなのはstrikers～失った力～

2011年10月25日12時08分発行